

第117号

書評

【特集】

学生短評

関西大学生協組織委員会内

『書評』編集委員会

【講演録】

日本はどこに向かうのか

辺見 庸

【連載】

日本中国 ことばの^{ゆきき}来往

その62

芝田 稔

おいてけぼり

-宮本輝試論X-

芝田 啓治

【寄稿】

濟州島は風(パラム)の島

玄 善允

特集 ● 学生短評

学生短評とびら	5
環境問題の社会史	6
フォトジャーナリストの眼・季刊『TIDE』	9
トランスジェンダリズム	12
日本はアメリカに負けていない	15
日の丸とオリンピック	18
スピリチュアル	21
先住民族アイヌの現在	24
講演録		
日本はどこに向かうのか 辺見 庸 (作家)	28
寄稿		
济州島は風 (パラム) の島 玄 善允	54

連
載

日本中国ことばの来往ゆきまい その62……………芝田 稔 80

おいてけぼり——宮本輝試論X……………芝田 啓治 88

羅針盤……………2

編集後記……………94

題字■網千善教（元文学部教員）

2000.11 羅針盤



私が愛読している雑誌のひとつに「サイアス」という科学雑誌がある。「サイアス」は朝日新聞社から出版されている科学雑誌で、「青少年の科学離れが進む日本社会における貴重な情報源」として発刊されてきた。中央公論の「自然」、講談社の「クオーク」、平凡社の「アニメ」など、多数の科学雑誌が廃刊となっていく中で、根気よく発刊し続ける編集部姿勢に私自身、非常に好意を持っていた。しかし、その「サイアス」が来月号をもって廃刊となるらしい。

確かに「サイアス」は創刊以来、お世辞にも売れているとは言えない。近年は特に酷く、年間一億数千万円の赤字を出し続けている。しかし、年間二〇億〜三〇億円の利益を誇る朝日新聞社にとっては決して耐えられない赤字ではないし、それだけの赤字を出し続けても発行する意義のあるものだ。朝日新聞社自身が判断してきた。にもかかわらず、今回の青天の霹靂とも言える廃刊決定はどういうことなのだろうか。

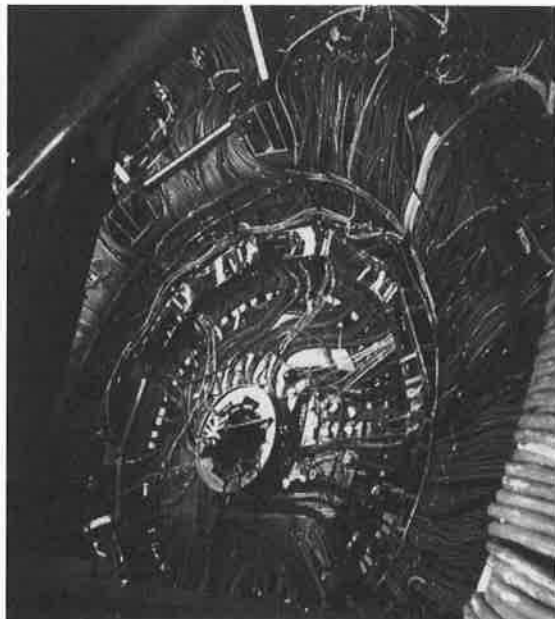
それには朝日新聞社経営陣の方針転換が大きく関わっているらしい。

現朝日新聞社社長は経済部出身であり、その影響もあってか、このところ朝日新聞社の経営合理化が強引に押し進められている。かの「アサヒグラフ」や「朝日年

鑑」の廃刊も無関係ではないだろう。確かに今は出版不況のご時世であるが、かといって「赤字でも意義あるものは出す」という方針を一八〇度転換させて「赤字だから切る」というのは読者に対する裏切りである。実際、様々な方面から朝日新聞社に対する批判の声が挙がっている。

出版局幹部から急に連載打ち切りを宣告された作家の立花隆さんもその一人で、「このような事態が続けば、いずれは博物館や美術館といったものも財政的理由で閉鎖され、日本から学術も科学も芸術も消えていくのでは」と危惧している。また、ドイツ文学者の池内紀さんは「朝日は「科学雑誌」を廃刊にする代わりに「経済誌」でも出そうというのではないだろうな」と朝日新聞社の商業主義的体質に強烈な批判を加えている。立花隆さんは科学者や作家に署名を募り、八〇〇名からなる署名を編集長に提出したが、結局、「ああ、あんなもんは見えないよ、見ないようにした」の一言と共に、「サイアス」廃刊の決定は下ってしまった。

現在、こういった過度な商業主義の嵐はなにも出版界だけに吹き荒れているのではなく、物販関係はもちろんのこと、私たちの身の回りの情報さえも商品化の対象となっている。テレビやラジオから流れるニュース、新聞



記事、私たちに事実を知らせるはずのマスコミが商業主義に侵され、情報の選別、操作を行っているのだ。

今回の書評には作家の辺見庸さんの講演録を収録している。辺見さんは元共同通信の記者で、そういったマスコミの商業主義を目の当たりにしており、非常に危機感を募らせていた。講演の中で辺見さんはこのように提言する。

「(私たちは)フォアグラのように情報を喰わされてオーバーフローしているんだけど、未来に対する予見性は増していない。それから哲学も深まっていない。何故か。それは、結局その情報っていうのが各個に商品化された情報媒体だからではないかと私は思っています。…売れなくて目立たないけれども非常に大事な情報がある、という風に私は思っています。それを自分の内面に照らし合わせていくということがとても必要だと思います。」

オウム事件も近年の少年事件も、全て商品としての価値を見いだされ報道される。一方で、私たちの生活に直接関わる憲法問題や人権問題はややこしく、売れない情報として切り捨てられる。しかし私たちの生活に直接関わるそれらの問題こそが、「売れなくて目立たないけれども大事な情報」ではないだろうか。

近年、産学協同が声高に謳われる中で、私たちの日常生活にある大学生活にも商業主義が押し寄せてきている。理学部重視の政策や資格を取るための課外授業の設置などが企業に「売れるモノ(学生)」を造るために優遇され、私たち学生の生活に直接関わる、サークル活動を始めた自主自治活動や、学内の福利厚生の実施は「売れないモノ」として年々矮小化―切り捨てられている。

しかし、その切り捨てられている「売れないモノ」こそ「売れないが非常に大事」なモノなのではないだろうか。

辺見庸さんはその「売れないが非常に大事」なモノを訴えかけ、守るために講演をし、本を書き続けている。

立花隆さんは「サイアス」廃刊阻止に向けてインターネットでの運動を始めた。

今、私たちには何ができるのか、考えていきたいと思う。

(山寺 光一・法学部生)

特集

— 学生短評 —

学生短評目次

環境問題の社会史 …………… 6	日の丸とオリンピック …………… 18
フォトジャーナリストの眼… 9 季刊『TIDE』	スピリチュアル …………… 21
トランスジェンダリズム …………… 12	先住民族アイヌの現在 …………… 24
日本はアメリカに負けていない … 15	



インターネットや携帯電話で情報を瞬時に容易に得ることができ、多くの人がそれを利用していきます。その一方で本を読む人が減り、「活字離れ」が進んでいると言われていきます。しかし、本は役に立たない無駄なものというわけではなく、知識や情報を得る手段として、その役割は以前と変わらぬ重要なものであるはずです。「活字離れ」と聞いて、自分は本を読んでいるから当てはまらないと言う人がいるかもしれません。たしかに試験勉強やレポートを書くためなどで読むことは多くあると思います。しかし、自主的に本を選び、読むことは少なくなっているのではないのでしょうか。今号の特集では七名の学生の短評を紹介しています。さまざまなジャンルの本を紹介しているのです。きっとあなたの読書のヒントなると思います。また短評で紹介されている本を自分でも一度読んでみて、短評で紹介されていることと自分の感想を比較してみるのもおもしろいのではないのでしょうか。

『書評』編集委員会

■短評■
環境問題の社会史



飯島伸子 著

有斐閣/定価二一〇〇円

近年「環境問題」ブームが巻き起こっている。テレビをつけても、「ガラスの地球を救おう」などというコピーのコマーシャルや番組を目にすることが多くなつた。往々にしてそこで取り上げられている「環境問題」というのは、大気汚染や砂漠化、温暖化などの地球規模の問題であり、それを「こんなすばらしい科学技術で解決しようとしているんですよ。」といった論調だ。企業やマ

スコミが環境問題を歴史や人々の生活から分断し、情報商品として利用しているのだから。だから、どれも「はじめに問題ありき」で、問題が発生した経緯や汚染地域とその周辺で生活している人々の顔が見えてこない。「環境問題」という言葉がこれほど蔓延しても、その内実を知る人が少ない（少なくとも私は知らなかった）のはそういった背景があるからではないか。

今回紹介する「環境問題の社会史」は「環境問題を「生きた人間達」と「自然環境」の間に発生する問題とし、その時代の社会的側面に注目しながら、時系列的に検討していく」というものである。日本を中心に、江戸時代から現代までの様々な環境問題の例を挙げ、その変遷、原因を探っていく。

一般的には環境問題というのは近代に入ってから発生したというイメ

ージが強く、江戸時代の環境問題と言われてもピンと来ない。しかし、環境問題の起源は意外に古く、かのメソポタミア文明も建築用材、土地確保の目的で周辺森林を伐採したため、砂漠化し、滅亡の道を辿った。また中国でも、万里の長城建設のために、黄河流域の材木を大量に使用した結果、深刻な水害が発生している。日本でも江戸幕府が進めた鉾山開発で、付近の農民が多大な鉾毒被害に晒されていたという記録が残っているし、「明治」期に入ると「殖産興業」「富国強兵」の二大国策の元、環境、住民を無視した開発が急激に進められ、江戸時代から続く鉾害問題に加え、製鉄所、紡績所から発生する煤煙による大気汚染や労働者の健康問題も多発している。特に、「もの言う道具」として扱われる労働者の健康問題は深刻で、当時の紡績工場だけをみても、年間四万人も

の労働者が結核を煩っていたという。このように環境問題は人間が文明を築いた時から既に存在しており、単なる自然破壊だけに止まらず、健康問題を始めとする様々な問題を併発してきた。

明治維新以降、日本は急激に近代化を押し進め、それはいやがおうにも重化学工業重視の開発を進めることになった。その開発が自然や人権を無視した強引なものであったことは、イタイイタイ病や水俣病といった多数の公害問題の出現を見ても明らかだろう。現在でこそ、被害者をはじめとする市民の血の滲むような努力により、公害がその問題性を問われることなく素通りしていくような事態は少なくなつたが、未だに原発問題やダイオキシン問題などといったものが強引な開発の副産物として発生している。そしてこのような元来の強引な開発に加え、現代の環

境問題には「問題の」複雑化」、また、東南アジアなどの後進国への「問題の」輸出」などの特徴があり、更に状況を深刻なもの、解りにくいものとさせている。ダイオキシン問題はその顕著な例で、大気汚染はさることながら、被害者への対応、公害調停、労災問題、風評被害と挙げればきりが無い。非常に問題の構造が解りにくくなっている。解りにくいから情報商品として売れない、売れないからマスコミ等で取り上げられない、結果、問題意識が社会に浸透しにくいという図式が出来上がつ



てしまうのだ。そしてそれは環境問題の輸出という点でも同様で、例えば、インドネシアでは日本からの「援助」という名の企業開発によって伝統的な農漁業生活環境に工業化都市化の波が押し寄せており、住民の健康に多大なる被害が出ている。

しかも利潤の大半はその土地の住民ではなく、開発主体である日本の企業に渡っているのである（日本はインドネシアで養殖されるエビの七割を輸入している）。中国においても、私たち日本人が好むカシミアの採取のため、山羊を従来の数十倍という規模で飼育し、その結果、急激な地質の変化と砂漠化に見舞われているという。

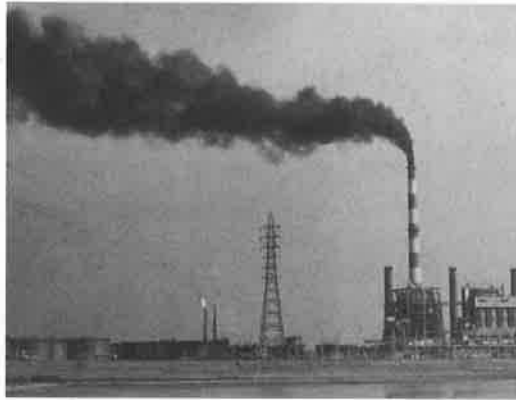
しかし、私たちがエビを食べる時やカシミアのセーターを買う時に、インドネシアで働いている労働者の顔も中国の不毛の大地も見えてはこない。地理的距離があり、複雑な国

家間でのやりとりということ、やはり解りにくいのだ。

このように現代の環境問題は目を凝らさないと非常に見えにくい。

しかし、これほど複雑化し、見えにくくなっている環境問題にも、一貫した構造が存在していると著者はいう。それは、「環境問題を引き起こすのは軍事的、経済的に力を持つ人々であり、環境問題を受けるのは逆に、そういった力を持たない人々である」という構造だ。どんなに問題が見えにくくともこの構造は全く変わらない。

では私たちは環境問題の加害者、被害者どちらなのだろうか。私は両方ではないかと考えている。もちろん視点を広げれば「先進国―後進国」―「加害者―被害者」の構造がはつきりと現れてくるが、環境問題を私たちの日常に引きつけて考えた時には被害者としての私たちの姿も



見えてくる。先程のインドネシアの例を見ても、私たちの何気ない生活自体が彼らの犠牲の上に成り立っており、その意味では加害者である。しかし一方で、ダイオキシンの汚染を始めとする様々な環境汚染の被害を私たちは被っている。その両方を見つめないと、現代の複雑化した環境

問題は見えてこないのではないだろうか。

今、私たちに出来ることはそうした状況をまず「知る」ことだと思う。著者はこう言っている「インドネシアのエビを食べてはいけな」と言っているのではない。自らの消費生活が、ほかの国々の環境や資源そして人々に及ぼしている影響について知ることです。すべてはそこから始まる」

私たちの周りには無数の環境問題が存在している。また、それがベールに包まれているかのように見えにくい状況にもある。まず、どういう問題が存在するのか、また、なぜ見えにくいのかということを考えていかなければならないと思う。その手がかりの一つとして、是非ともこの「環境問題の社会史」を一読してもらいたい。

(湯瀬 光一・法学部三回生)

先日、組織委員会が開いた講演会で
 辺見庸氏は、現在日本にとって必
 要なもの一つに「自らを見通す目」
 を挙げられた。客体と第三者を見渡
 す目が有っても、その場に居合わせ
 ている「自ら」に対する省察がなけ
 ればそこで見たことを他者に対して
 十分に伝えるには至らない。

この「自らを見通す目」無くして
 成り立たないものの中に自らの立場
 を明らかにし、報道する「ジャーナ

■短評■
 フォトジャーナリストの眼
 長倉洋海 著
 岩波新書／定価六二〇円

季刊『TIDE』
 窓社／定価一八〇〇円

リズム」の世界があることはいうま
 でもないが、ここでは特に「フォト
 ジャーナリズム」に絞って幾つかの
 本をご紹介したい。



まず、長倉洋海氏の「フォトジャ
 ーナリストの眼」。氏は同志社大学
 在学中より海外を転々とされ、取材
 を重ねられてきたことで知られる気
 鋭のフォトジャーナリスト。この本
 の最終章「私のフォトジャーナリス



ト」で彼はこう言っている。「自分
 の視点」を獲得するのは大変なこと
 だ。私もそれを掴むために、多くの
 時間を費やしてきたような気がする。
 自分の視点は様々な取材と経験を重ね
 るなかでしか創り出せない。人に
 出会い、取材をし、さらに発表した
 写真を大勢の人に見てもらおう。この
 繰り返しをなかでしか自分のスタイ
 ルや自分の眼は生まれてこない」と。

この「自己を見通す目」について、
 日本は戦時体制下にあつても結局「国
 家としての日本自身」を見てこなか
 ったことが、多川清一氏の著書「戦
 争のグラフィズム」FRONTを創
 った人々」に示されている。



この本によると、戦時広報紙「F

「RONT」は「創立の時点ではA3判三六ページを基準にした月刊雑誌」として「東亜建設」名称が付けられていたが、「あくまでも平時における国家宣伝誌」を考えてのものだったという。このため、開戦後、「FRONT」として発行されるに際しても、「企画から完成まで一二年かかっている」状況であったとのことで、言ってみれば「その本来の目



的である宣伝物としての効果はどうであったかということになると、これはもう、何も分かっていないのである」とされているところからしても、結局「戦争という壮大な無駄の

一部」に終わってしまうことがうかがわれる。

また、写真や文章がどれほどウソを生じやすいかという怖さもこの本を通して感じていただけだと思う。

かつてダイアナ妃事故死に際し、パパラッチの追っかけをその原因の一つとみる説があった。

当時の証言などでは、ダイアナ妃の乗った車には一〇人のカメラマンが後を追いかけていたそうである。

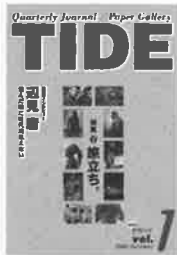
彼らは間違いなく「現場を押さえる」という報道の基本のためにそうしたのであるが、同時に「現場を作りだしている」という自覚に欠けていた。

伝えるべきは飽くまで原因、あるいは結果となる「現場の動静」であって、自らのその現場を動かしていくというような役割は始めから与えられて(も)いない(ものだ)、という「傍観者としての自覚」にである。

つまるところフォトジャーナリス

トは現場に「潜入」する感覚で臨むべきなのだが、それが出来そうにないからといって、遠巻きに伝聞を伝えていけば事足りりとするものでもないし、いわんや自らの手で現場をでっち上げるなど愚の骨頂も甚だしい。そういう点においては戦時広報ほど報道の名に値しない報道も他にない。

さて、戦後、アサヒグラフが復刊し、またFRONTにとつてのライバルであったLIFE誌が契約カメラマンを次々と海の向こうに派遣し、隆盛を誇り続けていた時代も六〇〜七〇年代のベトナム戦争報道を契機に変わり始めた。国家が戦場において、空気のように潜んでいるフォトジャーナリスト達の蠢きを疎んじたためである。そのような国家の動きを端的に示したのが、湾岸戦争に代表される多国籍軍側の報道管制であろう。ここにおいて軍は報道陣、マ



スメディアやフリージャーナリスト達を殆ど戦場の最前線へ同行させなかった。彼らには軍広報からの資料を配付、説明するだけという「巨大な広告塔」の役目を果たさせたのである。おそらくそういう扱いを受けたフラストレーションもあったのだろう、ついには「油まみれの鵜」という贗作写真を特ダネとして世界に配信するメディアが現れるに至った。そしてこのような状況が、見る人に「もはやグラフィ誌は信頼に足らん」と嫌悪を催させたのか、遂に本年、米国と日本において最も硬派と目されてきたLIFEとアサヒグラフ両誌が休刊となった。

ところがそのような退潮傾向にあ

って、ひときわ異彩を放つグラフィ誌が創刊された。「TIDE」である。この「TIDE」は休刊時のLIFEやアサヒグラフとは明確に異なる特色を持っている。前編モノクローム写真で構成されている点である。



つまり色のないことが特色となるのだが、この無色という、通常まずあり得ない世界での表現にこだわればこそ、見えてくる世界、色彩を廃することによって撮り手と受け手の誤解の基を一つ取り除いた世界が創り上げられる。その姿勢こそ、このグラフィ誌の凄さである。第一号の特集「旅立ち」はいわばそれまでの数多くあるカラーグラフィック風グラフィックの決別、色彩の派手派手しさでは

なく、飽くまで被写体そのものの像にこそ撮影者の意図が込められていることを表明したものに他ならない。この「写真をもって語らせること」を更に推し進めたのが第二号の特集



「日本国憲法」である。ここでは前号の特集にあつた作者の作品解説すらほとんど無く、各写真に付けるキヤプションすらないものもある。この辺りは長倉氏の著作による見解とはいささか意を異にするが、なにより「編集者側で写真に余計な手を加えない」点を徹底させているところは共通している。

(高松 塘・法学部三回生)



■短評■
トランスジェンダリズム
—性別の彼岸—

松尾 寿子 著

世織書房／定価三四〇〇円

この本は「T S」について述べた本である。そう言われて咄嗟に内容が分かる人は、これを読んでいる読者の中に、どれ位いるだろうか。最初に説明しておく、「T S」とは「トランスセクシャル」の略語であり、「生まれついた肉体に違和感を持ち続け、手術などの外科的処置（性転換手術）によって肉体の性別を変える事を望む人」を指す言葉である。松尾氏が「私達は、いかに

『ジェンダー・アイデンティティ（性自認。自分を男性と思っているか／女性と思っているか、という事）』と『セクシャル・オリエンテーション（性的指向。性的欲望・関心が、同性／異性／両性の内、どちらに向いているか―又は、どれにも向いていないかという事）』を混同して、性転換者と同性愛者を結び付けている事か」と述べているように、T Sと同性愛者は違った存在である。T Sの抱えている問題は「自分を男性と思っているか／女性と思っているか」という事であって、外に向けられた性的指向の問題ではないので、T Sでありゲイ・レズビアン・バイセクシャルである人は存在する。しかし、本の中で松尾氏の友人の医師が「『生物学的に同性である人が好きだから性転換したい』人に性転換手術が行なわれる事は、まずありません。何故ならば、そのような間違

った理由で手術を行なえば、後で本人が後悔するからです」と述べているように、同性愛が高じてT Sになる、という人は存在しない。



TSである人たちは、時代や場所・肉体上の性別を問わず存在してきたにも関わらず、その存在が正しく認識されているとは言い難い状況におかされてきた。現在の日本に於いても、松尾氏が「昭和四五年のブルーボーイ事件」性転換手術を行なった産婦人科医への有罪判決―以降、日本の性転換手術事情は闇に突入した―「特に現在の日本に於いて、性転換手術についての知識や情報は驚く程少ない」と述べている事を鑑みれば、未だTSにとつての暗黒時代は継続していると言えるであろう。具体例としても、「オランダや中国・イタリアなどが性転換者の社会保障番号やパスポートの新しい性への変更を認めているのに対して、日本では、そういった事が一切認められていない」が挙げられている。

それにしても一体何故、TSなどの性的マイノリティー（少数者）は



差別され、しかもそれが当然であるかのように扱われてきたのであるか？ その答えは、松尾氏曰く、「生殖から外れた性への禁忌意識」であり、私も松尾氏の言う通りではないかという風に思う。松尾氏が述べられた前出の論は、性的マイノリティーを「異端」と決め付け、排除しようとする躍起になるマジヨリティー（少数者）の問題である。人は、自分の知識の範疇で理解出来ないもの

を否定し、見えない所に追いやるとうとする傾向を有しているように思われる。それは、もしかしたら、人が―遙か昔の、未だ道具すら持たなかつた時代の「ヒト」が―大自然の中で生き残る為に「よく分からない」存在である天変地異を忌避した事の名残なのかもしれない。しかし、ここで長々と原因論を述べても仕方が無い。問題なのは「差別がある、そこからどうしてゆくか」という事―つまり現在、そして未来へと向かう私達の姿勢である。無論、それはTSや同性愛者などの性的マイノリティーを「排除」の対象としてや「異端」の眼差しで見えるものではない。そもそもマイノリティーとマジヨリティーの二つを敵対として捉える事自体が問題なのではないだろうか。私は、マイノリティー・マジヨリティー間のコミュニケーションを密にし、互いに理解を進めていく事が差

別をなくす為に必要とされる姿勢であると考ええる。こういった考えを裏付けるものとして、近年、若い世代の性的少数者を中心に起こっている「コミュニティ（共同体）」を創ろうという動きがある。彼（女）ら若い世代の性的マイノリティーが創るコミュニティには、学習会を重ねてジェンダー学上の見地から自他への理解を試みるもの・ただ単に交流を深める事だけを目的としたもの・その中間など、様々な形態のものがある。しかし、それらは「性的少数者だけで構成されるもの」と「性的少数者・多数者共にメンバーを構成しているもの」の二つに大別される。この二つを分けるものは、その「目的」である。前者の目的は「性的少数者に関する正しい情報を得られず『自分は異常なのではないか』と悩み苦しんでいる性的少数者に『性的少数者である事は異常ではないん

だ』というメッセージを発信し、少数者が本当の自分を出せる場を作る事」であり、後者の目的は「性的少数者・多数者間の理解を図り、共存の方向を目指す事」である。こういったコミュニティの発達は、これまで社会の中で抑えつけられてきた性的少数者自身が社会に対して働きかけをするようになった事の現れだろう。ただ、付け加えるなら、理解の姿勢が「マイノリティー・マジョリティー」双方であれば良いと思う。現在の日本に蔓延する、性的マイノリティーへの差別を今すぐになくす事は難しいと思う。しかし、性的マイノリティー・マジョリティーの別を問わず大勢の人が、マイノリティーへの差別をマジョリティーが行い、又は助長し、見逃している事実を認識し、それを積極的に訴え、状況改善を求めていく事で、相互に理解を深めていく事が出来るのではな

いだらうか。そして、いつか社会制度を変革し、差別の無い社会を創っていきけるのではないかと信じている。最後に、「FTM (Female To Male) の略。女性から男性への性転換希望者を指す) 日本」の主催者であり、実際にFTMである「虎井まさ衛」さんの「ある性転換者の記録」という本を紹介しておく。「トランスジェンダリズム」が一般的なTSについて述べたものであるのに対し、こちらは虎井さんが個人的な性転換経験を述べられたものである。

(中川 由香里・法学部一回生)

明治維新以来、日本はアメリカやヨーロッパに過剰なまでに憧れてきた。特に敗戦後はアメリカに強く憧れ、そして今でも憧れているように思える。それは服装や食事、インターネットの普及などに表れているように思われる。異文化を取り入れることは決して悪いことではない。むしろこれからも積極的に行っていくべきであろう。実際、日本は古くから朝鮮半島や中国大陸をはじめとす



■短評■
日本はアメリカに負けていない
 —目をさせ、お人好しの日本—改題—
 ビル・トッピン 著
 ごま書房／定価六〇〇円

る様々な国々からの文化の影響を多分に受けてきた。しかし、明治維新以降「脱亜入欧」の四字の下に、我々がむしやらに、そしてあまりにも不注意に「アメリカ」、あるいは「ヨーロッパ」を取り入れてきてしまったように思われる。その具体的な結果の一つがアジア諸国への侵略であり、(天皇制をはじめとする大日本帝国時代の社会構造そのものも大きな要因としてあるが。)しかもそれは軍事力から経済力に、軍隊から企業に姿を変えて現在も続いている。こうしたこと背景には、アメリカやヨーロッパの持つ「先進的」なイメージへの憧れがあったように思われる。例えば、街中に林立するハンバーガーショップや喫茶店など洋食を取り扱う店の数々、「ノーマラ イゼーション」「ドメスティック」など、様々な状況において飛び交う英語の単語……これだけ見てもいか

に我々日本人がアメリカから様々な文化を取り入れてきたかがわかるであろう。しかしながら、我々が取り入れてきたそれらのものが全て恩恵だけをもたらしてきたわけではないことは六百兆円からなる日本の負債、また、その債務のアジア諸国への押しつけ(表面的にはODAや円借款という援助の名目であるが)を見ても明らかである。さらにその重化学工場中心の開発は数々の環境破壊という問題も起こしている。例えば、これは南米に於いても言えることであるが、製紙資源として広大な熱帯雨林を必要以上に伐採している。これにより熱帯雨林が減少し、温室効果で地球の気温が上昇するだけでなく、そこに住む動植物が成す複雑な生態系が破壊され、またそれにより地盤が脆くなり、土砂崩れなどの災害を引き起こす。他にも、商用作物のプランテーションの管理に大量の

農業や化学肥料を使用することで、周辺の大気、土壌、水質を汚染するだけでなく、そこで働いている人々の健康をも害している。また商用作物プランテーションは単一の作物を作るため、食糧不足が起こると大量の餓死者が出るという危険性も持ち合わせている。また、アジア諸国は先進諸国に比べて賃金が安く上がり、また官憲の目も甘いため、化学工場の建設や有害廃棄物の不法投棄がよく行われている。このような状態は農業と同じく、周辺環境や住民の健康に多大な被害を与えるばかりでなく、先進諸国とアジア諸国との間に強い軋轢を生み出す原因にもなってしまうと言える。アフリカの国々においても同じような状況が起こっている。日本やアメリカなどの先進諸国の発展は、こういったアジアやアフリカの国々の犠牲の上に成り立っているのである。

この本で、筆者はかなり辛辣な言葉でアメリカという国の現状を批判している。しかしそれと同じように日本、ひいては我々の現状をもう一度見直していかねければならないであろう。何故なら、日本も現在アメリカをはじめとする「先進国」の一員であり、自国の地位や経済の保身のために「国際化」「グローバルゼーション」を掲げ、一方では「IT革命」により、ほとんどの人が携帯電話を所有し、またインターネットなどのグローバルネットワークを利用できる状態にあり、また一方では一〇億人以上の人々が食べることさえままならないという信じ難い状態にあるにもかかわらず、そうした「後進国」を圧倒的に勝ち目のない市場競争の渦中に巻き込み、食いものにしていくからである。

私たちの日常生活そのものが他のアジア諸国とその国に住まう人々を



犠牲にして成り立っている以上、「南北問題とか、アジアの現状などは私には関係ない。」と言うことはできないだろう。しかし私たちの身の回りには過剰ともいふべき量の情報が氾濫している。その中で現状を的確に把握できる情報だけを取捨選択して受け取ることは非常に難しいと思われる。しかし、私たちはただ単なる情報の受け手として構え、情報が洪水に溺れるだけではいけないであらう。自分にとって必要な情報、不必要な情報、正確に事実を伝えてくれる情報、デマや嘘に汚染された情報などを的確に見極め、それらの意見を自分なりに編集し、自分の意見として使えるようにならなければならない。そして、開かれたネットワーク空間の中や実空間において、それらの意見を互いにぶつけ合い、情報の中にある誤りを除いたり、情報自体の質を高め合うべきである。その

ようにして高められた情報を用いて、我々は世界各地で起こっている様々な問題と向き合い、そしてそれらを解決するための手段を模索していくべきであると思う。

現在、日本は欧米から導入した制度や文化の中に潜んでいた問題と遭遇し、その危機を打開しようと必死で取り組んでいる。しかしもう少し前に、情報の取捨選択をしっかりと行っていれば、こうはならなかったかもしれない。

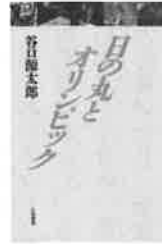
最後になったが、この本はアメリカと日本の関係だけに問題を収斂させて書かれている。したがって被害者としての日本の姿は書かれているものの、加害者としての日本の姿は書かれていない、という点に留意して読んでいただきたい。また、アメリカが加害者で、過剰なまでに悪辣な国扱いされているが、これはアメリカの悪い面であり、アメリカの抱



えている問題でもあるため、偏見を抱いたりしないで欲しいと切に願う。

(吉田 創・法学部一回生)

■短評■
日の丸とオリンピック



谷口源太郎 著
文藝春秋 / 定価一六九〇円

二〇〇〇年九月二十五日から一〇月一日までシドニーでオリンピックが開かれた。皆さんはその様子をどのように見ただろうか。私は、選手を応援する反面、どこか冷めた目で見たいような気がする。オリンピックの開催期間中、テレビ、新聞などで「感動をありがとう」という言葉をよく目にしたが、私は素直に感動できなかった。なぜならそれが造られた、演出された感動に思えたから

だ。

長野オリンピックでもそうであったが、オリンピックにはなかなか見えてこない負の側面がある。招致のためにIOC委員を接待し、多額の買収金が使われる。大会後のことを考慮していないオリンピックのためだけの施設や競技場の建設に莫大な資金が使われる。そしてそれらの施設、競技場の建設によって新しい土地が次々に開拓され、環境破壊が引き起こされる。また過剰な競争意識は、選手のドーピングを招く。一日の大半をトレーニングに使い、それで企業から収入を得ている選手を果たしてアマチュアと言えるのかというアマチュアリズムの問題もでてくる。このように問題点を挙げればきりが無い。現実のオリンピックでは憲章に謳われている理念とは正反対のことが起きているのだ。しかしマスコミは、そのような負の面は全く

流さない。目に入ってくるのは、選手の華麗な技や、勝利した選手の表情など華々しい場面だけである。

今回、紹介する「日の丸とオリンピック」はそのようなマスコミの批判も含め、オリンピックが内包する多くの問題点を指摘している。その中でオリンピックの実態を著者はこのようにまとめている。「オリンピックを頂点とするエリートスポーツは国家間の競争の道具として利用され、勝利至上主義に陥った。そればかりか市場原理に拘束され、より高い商品価値を求められ、選手は人間としての極限にまで追い込まれている。行き着くところまで行き着いたエリートスポーツは、見せ物の世界で生き延びるしかない」とさえないえるのではなからうか」と。

この一節は、「国家間の競争」、「勝利至上主義」、「市場原理」とキーワードをすべて含んでおり、オリ

ンピックの抱える問題をよく表している。また権力とスポーツの関係がよく分かる例として本書でも取り上げられている「モスクワオリンピックボイコット」を挙げる事ができる。

一九八〇年、アメリカ大統領カーターはソ連のアフガニスタン侵攻を理由に、同年開催される予定のモスクワ・オリンピックのボイコットを西側諸国に呼びかけた。ためらうことなくアメリカに追従した日本政府はボイコットを決め、体協・JOC（体協はJOCの上部機構であり、二つの組織は本来、政府の干渉を受けない自立した組織である）に圧力をかけた。これに対してJOCは当初「参加」を貫いていた。しかし、体協の理事会には政府から派遣された官房長官が出席し、その場で「参加には反対」という政府見解を表明し、体協は「不参加」を表明した。

政府は、JOCの上部機構である体協に圧力をかけるだけでなく、あらゆる手段を使って「オリンピック不参加」を図った。例えば「政府のオリンピック援助金を打ち切る」だとか「公務員の選手は派遣できない」というようなものだ。当初「参加」を強く希望していたJOCも最終決定の場ですとうとう屈してしまい、日本のオリンピックボイコットが決定した。このボイコットを契機に体協、JOCの自立性はますます失われ、普及振興どころか、ますます政府主導のスポーツへの色合いが強まっていった。

政治の圧力によって決定を覆された例は、国体でもみられる。一九八七年一〇月、沖縄で第四二回秋季国体が開催された。第二次世界大戦で甚大な被害を受け、敗戦後もアメリカの施政下で苦しんできた沖縄に対して、文部省や体育協会、競技団体

は、そこに住む人たちが、「日の丸や君が代」にどのような感情を抱いているか理解しようとはせず、なんのためらいもなく沖縄に日の丸と君が代を押し付けた。読谷村のソフトボール会場に掲揚された日の丸を地元住人・知花昌一さんが引き降ろして焼き捨てる行為にでたのは、この時である。知花さんの行為は、国や本土の人間たちに対する沖縄側の抗議を意味していた。日の丸を焼き捨てることは、国家主義に支配されている国体への痛烈な批判ともなった。

一九八七年三月議会における村長の施政方針演説での「反対表明と、スポーツと教育はいかなる政治の抑圧から自由でなければなりません。なぜなら、戦争の悲惨な歴史を振り返る時、そこにはいつも政治がスポーツと教育を支配し、従属させたところに悲惨な人類の戦争があったことを忘れてはなりません」とする一

八九六年一二月議会における日の丸掲揚、「君が代」斉唱の押しつけに反対する村議会決議があり、読谷村民の大多数が反対の意思表示を示している。それに対して日本ソフトボール協会の会長は「日の丸・君が代を実施しなければ、国体競技会場を変更する」と発言し、住民の意思を踏みにじった。

このように、スポーツの現状を見ているとスポーツ界と政治が一体化していることがよく分かる。「スポーツの大衆化」という言葉をよく耳にするが、現在のスポーツは、大衆のものではなく、一部の人間の利益のために使われているのだ。

著者は最後の章で「今何が必要か」と題し、次のように述べている。「オカミの規制や束縛に反対の声を上げること必要だが、なによりも市民自身がスポーツが本来持っている意義をはっきりと自覚し、積極的

にスポーツにかかわっていくことが求められているといえよう」と。

私は、「行政」の姿勢を直すことにしか考えが及ばなかった。しかし、著者はそれだけではなく、市民自身が積極的にかかわっていくことも必要だと指摘している。つまり現状は、市民がスポーツに対して積極的にかかわっていないということである。

テニス、サッカーなど多くのスポーツは、市民の遊びの中から生み出されたものだ。そして、それは市民同士のコミュニケーションのツールとしての役割も果たし、市民にとつて



非常に身近なものであった。ところがスポーツの現状は、今まで述べてきたように、市民の手から離れ、一部のスポーツエリートと権力者のものになっている。そこで私なりに著者の言葉を解釈するところなる。

「スポーツが本来持っている意義」というのは、スポーツが決して一部の人間のものではなく、すべて市民のものであつて、それを楽しむことができるということ。「積極的にかかわる」ということは、多くの市民がスポーツの現状を知り、そこから「本来もっている意義」に近づけていくということである。

私は、スポーツの抱える問題が知られない限り、政治と一体化した今のスポーツは変わらないと考える。この本は、そのようなスポーツの現状を知るために、非常にいい本であったと思う。

(谷井 康彦・文学部二回生)



■短評■

スピリイチュアル

たちばな 仁 著

元就出版社／定価一四一九円

何年にも渡る、長い旅の物語であった、といっても地理的などこかの場所へ旅をするのではない主人公カズオが失われていた自分自身を取り戻すための、心の旅である。読者としてカズオの旅を追っていくことで、人間というのは他人によって傷つけられてしまったとしても、やっぱりその傷を癒し、治してくれるのは他人によってであるということ、改めて確認させられた。どんなに強が

ってみたところで、やっぱり人間は一人では生きていけない。一人ですべてを抱えきれることのできる頑丈な人間なんていない。

主人公カズオは小さいときから、自分がなぜか周りの子供達とは違う目でみられていることを、ひしひしと感じていた。小学校の高学年になり、親戚の大人達の会話から、その疑問は明らかになる。

自分は私生児で、母親は現在一緒に暮らしている父親の妻、愛人という肩身の狭い立場にいたのである。〃周りの大人達に気に入られるためによい子にならなきゃ〃と、優等生を演じ続けるカズオだったが、多感な時期をくらしい情念に支配され続けたカズオにとって、次第に周囲の出来事は、自分とかけ離れた映像のように移り変わる世界として、捉えられていった。友人達に対しても壁を作り、自分をそいうった状況へと追

いやった両親に対しては、ただ憎しみだけが残り、高校卒業後に父親が亡くなったときも、何の感慨も湧かないようになっていた。

しかし、他人から自分自身を守るために作った世界からカズオを引っ張り出してくれたのも、他ならぬ〃他人〃であった。性欲といった本能が、まず最初に他の世界にでていこうとし、それを必要としたのがカズオを浮気の格好の対象としたのがカズオである。この時のカズオはまだ、他人を思いやり、愛するということが分からず、カナエが自分の身体を必要としてくれているというだけ身を委ね、結果、カナエを傷つけることになってしまう。

次にカズオは、カズオのことを心から愛し、守ってやりたいと切に願う同性愛者のヒロシと出会う。自分のことを本当に想ってくれている、本当に自分を必要としてくれている



という理由から、何となくヒロシとの関係を始めたカズオ。どうしてヒロシはこんなに自分を必要としているのか、自分にそんな必要とされる価値があるのか、そしてヒロシの想いに、自分は応えることができるのかと悩み、葛藤するカズオだったが、自分を守ろうとしてくれる人間が存在しているということを知ること、カズオを厚く取り囲んでいた壁は少しずつ取り除かれていく。

カズオが他人に必要とされること、そしてカズオが他人を愛し、守ってやるということを知ったのは、アキコが存在によってである。過去に深い心の傷を負ったアキコが、夜中に“助けて”とうなされるのを見て、“自分がアキコのことを守ってやる”という感情を抱くのである。アキコは自分の過去の傷をカズオにも押しつけることはできず、ある日突然カズオのもとから姿を消し、カ

ズオはアキコを追いかけ、再会するのであるが、アキコが自分で選んだ道を行かせてやるというもの、思いやりであるという事を知る。

カズオが大学に入学した当初から“カズオは自分と同じ何かを持つている”ということを感じて、時にカズオにそっけない態度をとられても、ずっとカズオのことを見守り続けてきた同じ学科のケンジ、ダイスケ、マサキの存在もとても大きかった。

特にケンジは、ずっとカズオに我慢強く、蜘蛛の糸を垂らし続けてやり、“カズオは自分たちの仲間なんだぞ”とあって、カズオのケンジ達にとっての必要性を強調し続けてきた。三人の友人達は、大学を卒業した後も関係の続く、カズオにとってかけがえのない財産となる。

カズオの様に、あらゆる理由でら傷つけられ、自分を守ろう、自分と外の世界を切り離そうとし、その結

果、自分の部屋、あるいは家から一歩も外に出ることのできない引きこもりや最悪、自殺に至ってしまうというケースは年々増えている。これだけ多くの人が自殺をしようという要因の一つに、人々がお互いに対して無関心になっているというところが挙げられると思う。数日間、家に帰らない「プチ家出」を黙認したり、腫れ物に触るかのように自分の子供に接する親は、その典型的な例である。父親と母親と学校の先生が、子供の人形を互いに押しつけあって誰も受け取ろうとしないテレビコマードシヤルがあつたが、まさにまさにそういう現状である。引きこもりや自殺へと至ってしまう人たちは、自分を守るために外の世界を断ち切ろうとしているわけだから、周りの人がどんなにその人のことを想い、必要としていたとしても、その事に気がつきにくくなっている。カズオに

対してケンジがそうであつたように、おせっかいなぐらい周りの者がボールでも石ころでも投げてやっつけてほしい。一〇〇個投げれば一個ぐらいは、もしかしたら壁の向こう側に届くかもしれないから。

外の世界と遮断することで自分を守ろうとしている人は、必ず自分のことを想い、必要としてくれる人がいるということを知ってほしい。それは両親なのか兄弟なのか恋人なのか友人なのか、はたまた全然別の人なのか、もしかしたら、まだその人と出会っていないのかもしれないが自らの手で早々に命を終わらせるのではなく、与えられた生涯を使ってその人を捜し出してほしい。それを生きた支えにしてほしい。生涯を通して旅を続けてほしい。

また、この本の著者であるたちはな仁さんは関大のOBである。作中には法文坂の風景を始め、昔の関大

の雰囲気描かれており、私達関大生には特別なおもしろさも与えられる本である。

(松田 さよこ・文学部二回生)



先住民アイヌの現在

■短評■

本多勝一 著

朝日新聞社／定価四五〇円

「先住民民族」と呼ばれる人々を知っているだろうか。誰でも一度は聞いたことがあると思う。よく知られているものといえば、たとえばコロンブスの到達以前から南北アメリカ大陸に居住していた諸民族や、ヨーロッパ人が入植する前からオーストラリア大陸で生活していた諸民族などだろう。国連の推計では、こうした人々は全世界で総計約三億人にのぼるとされている。

彼ら「先住民民族」には共通した歴史がある。それは、ヨーロッパを起源とする「近代国家」が世界中に形成されていく中で、支配民族によって侵略され、強制的にその国家に組み込まれていった歴史である。「差別と虐殺の五〇〇年」などといわれるように、古くから生活の基盤であった土地を奪われ、同化政策によって民族としての存在と文化を否定され、さらには大量の虐殺までも行われた。彼らの歴史は、私たちの想像をはるかに超えた壮絶なものであったにちがいない。

現在、こうした「先住民民族」の権利保障をもとめる動きが世界的に広まっている。これは、民族としての権利を蹂躪され続けてきたこれまでの歴史を問い直し、「民族自決権」や「民族自治権」を取り戻そうしていく運動だ。こうした動きがおこってきたのは一九七〇年頃からで、以

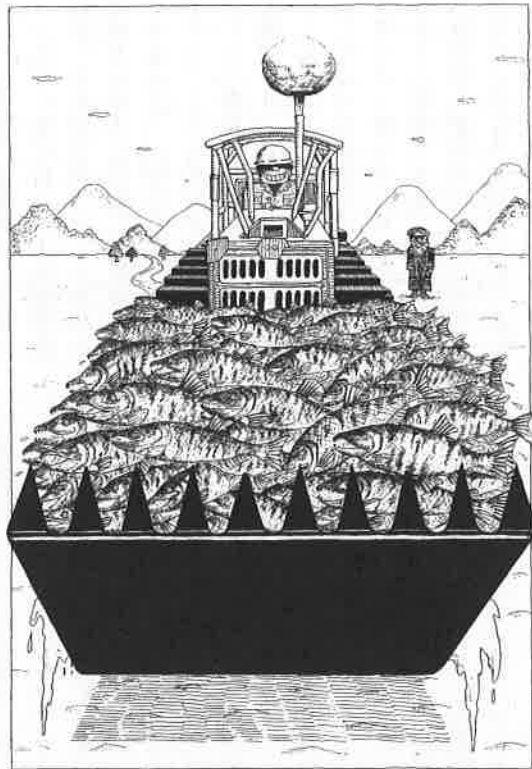
来数十年間にわたって世界各地の「先住民民族」が集う国際会議が何度も開かれてきた。こうした世界的な流れによって諸外国もさまざまな取り組みを行うようになり、特にオーストラリアやカナダなどは積極的に「民族復権」に取り組んでいる。ちなみに一九九四年から一〇年間は「国際先住民年」と定められており、世界各地の「先住民民族」の認知と権利拡大を目指した運動は今後さらに大きな潮流となっていくだろう。

そして、日本でその「先住民民族」にあたるのがアイヌ民族である。一般的にあまり認知されていないが、アイヌ民族にとつての日本人とは、本来アイヌモシリ（アイヌの土地）であった北海道を侵略した支配民族に他ならない。諸外国と同じように、土地を奪われ、一方的に国家に組み入れられ、伝統文化を否定され同化を強制されてきた歴史をアイヌ民族

も背負っているのだ。しかしこうした過去は、今の日本ではほとんど知られていないのが現状である。

実のところを言うと、かくいう私自身もアイヌ民族についてはごく一般的（つまり表面的）なことしか知らなかった。そんな私がここで本書を紹介する理由は、この本のなかに書かれている事実に非常な衝撃をうけたからなのだ。本多氏の言葉を借りれば、まさに『国家権力総力をあげてのアイヌいじめ』というべき情況が今なお進行していることを知って非常にショックをうけた。そして、アイヌ民族に関する私たちの「常識的」な知識がまったく「表面的」なものであり、本来もつとも「伝えられるべき事実」が全然知らされていないことをつくづく感じた。

その「伝えられるべき事実」のひとつとして、たとえば明治に入ってから行われた土地の収奪がある。維



新後、アイヌ民族はあらん限りの権利を奪われていくことになるが、その最も大きなものが土地の権利だった。良質の土地はほとんど和人に配分され、残りの山林野は国有地とされ、アイヌ民族に給与された土地はごくわずかなものだった（その多く

は荒地や湿地、傾斜地などだった）。狩猟や漁労も禁止され、アイヌ民族が裏山に薪を拾いに行けば「盗伐」、シカを捕れば「密猟」、川でサケを捕れば「密漁」として逮捕されるような状態だったのである。本書の中に、現在アイヌ記念館の館長である

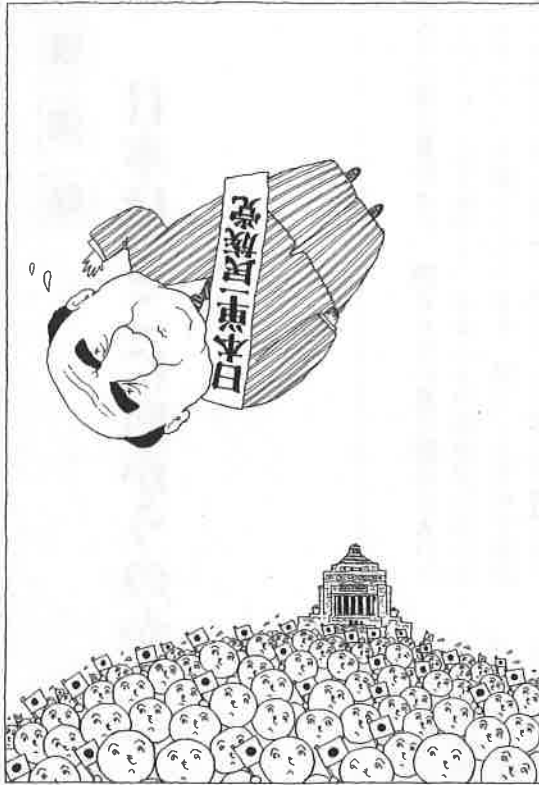
萱野茂氏が、子供の頃に父が「罪人」として連行された体験を述べている箇所がある。『…長いサーベルを下げた巡査が入ってきました。そして私の父へ「清太郎行くか」と言うのです。すると、父は板の間へひらぐものようにひれ伏して「はい、行きます」と答えたのです。ひれ伏した父の両眼からは大粒の涙が、板の間へぼとぼと落ちました。…(中略)…：きのうまで父が捕ってきて、私どもに食べさせ、あるいは近所の老人たちに分け与えていたアキアジは、捕ってはならない魚、つまり密漁であったというわけです。…(中略)…私は泣きながら父の後を追いかけると、私を連れ戻そうとして追ってくる大人たち、すぐ帰ってくるよという大人や父の顔には、私よりも大粒の涙が光り流れていたのを、ついきのうのように思い出すことができます。』

更に、こうした土地の収奪に加えて、「アイヌ」という民族を消滅させて「日本人」にしてしまう同化政策が強力におしすすめられていった。死者とともに形見の品や家も燃やしてしまう伝統的な習慣が禁止され、さらに民族の基盤たるアイヌ語が撤廃されて日本語の強制がはじめられる。一九〇一年には「旧土人児童教育規定」が制定され、アイヌ民族の子供達を日本人と区別して教育を受けさせるため、「旧土人学校」が建設された。こうして、アイヌ民族が培ってきた伝統文化はさまざまに速さで破壊され、衰退の一途を辿っていくことになったのである。

ここで述べたのはアイヌ民族の歴史のほんの一部分でしかない。しかしこうした事実でさえ、今の日本でどれほどの人が知っているだろうか。本来ならこのようなことこそ、きちんと伝えられるべきなのだ。

それでも、皆さんの中にはこういう疑問をもつ人もいるかもしれない。「アイヌ民族がひどい歴史を背負ってきたことは分かった。でも、今は大丈夫なんだろう？ 何も問題はおこっていないじゃないか」と。

しかし、結論から言うと、アイヌ民族をとりまく状況は戦後になっても基本的に変わっていない。日本政府は今なおアイヌ民族に対する「抑圧」の歴史を認めていないし、民族としての権利を尊重した対策をとらないまま放置しているのだ。アイヌ民族を継続して取材してきた本多氏は、本書のなかでその実態についてこう述べている。『…私は世界のさまざまな国を取材してきました。アフリカ以外の大陸の主な国はたいがい訪ねたと言えるでしょう。そして断言できます。はっきりした先住民族が現存する国で、日本のアイヌ民族ほど黙殺され、先住民族としての



権利が認められていない国はない、と。」

つまり、「問題がない」わけではないのだ。今なお「ひどい状況が存在している」にも関わらず、誰もそれに「気が付かない」、あるいはそれが「問題であることさえ分からな

い」というのが、今の日本の状況なのだ。現に、私たちが「先住民」という時、最初に「アイヌ民族」を答える人はかなり少ないのではないだろうか。アメリカなど諸外国の「先住民」を真っ先に思い浮かべてしまう人が多いのは、それだけア

イヌ民族が「民族としての権利」を黙殺され、ますます「先住民」として認知されにくくなっていることのアラわれだと思ふのだ。国際的に「先住民」の権利が見直されているなかで、日本はいつまで今のよう な状況を保持し続けるのだろうか。最後に、本書のなかで特に私が考えさせられた一節を紹介しよう。ここで使われている「アイヌ的存在」とは、要するに「差別される側」のことである。

「ある国の政治が良いか悪いかの一つの指標は、少数民族がまともに扱われているかどうかである。日本の近代化は「アイヌ的存在」の無視と犠牲の上に成立した。これが崩壊するのにも、「アイヌ的存在」の無視と犠牲に由来することにならう。」

(新知 小恵・社会学部)

講演録

日本はどこに向かうのか

辺見庸

「見えない像を見なさい、聞こえない音を聞きなさい」

こんにちは、辺見庸です。私なんかの講演会に沢山来ていただいて、有難うございます。時々、大学の学園祭とかに呼ばれて話したりするのですが、学生の前で話すくらい難しい事はないように思っています。私は五二歳ですから、皆さんの父親よりも年上なのではないでしょうか。娘も大学を卒業しまして、プーターローをやっていますけれど、娘も聞いてくれないような私の話が皆さんの胸に果してどれくらい届くか、これはちよつとした勝負だな、という風に思っています。私は、一方的に皆さんに何かメッセージを伝えたいというよりも、「皆さん

んが今どんな事を考えているのか」という事の方に、より多く興味があります。ただ、いきなり皆さんにインタビューする訳にもいかなないので、私の方から先ずひときりお話して、それから色んな質問とか、「辺見の言う事はここがおかしいんじゃないか。私はそうは思わない」という話を是非ともお聞きしたいと思っています。その後半の方に私は興味がありますので、その為に暫く、話にもならないような話をしたいと思います。

実を言いますと、私は「日本は何処に向かおうとしているのか」という事にはあまり興味がありません。紋切型と言いますか、田原総一郎とか、ああいう人たちがや

っているような事には、正直言つて興味が無いです。しかし間違ひなく悪い方向に向かつているとだけ、お約束できると思ひます。客観的に「日本の情勢はどうなつてゐるか」ということよりも、私とか皆さんの心の動きといふんですか、内面の問題としてどうなのかといふ話をしてみたいと思つてゐます。講演会の時間は二時間かそこらでしょうけれども、明日とか一週間後、或いは一年後に私の話が皆さんの身体の何処かに着床して残つていたら嬉しいな、と思ひます。一般的に、講演内容とか授業といったものは、とても全体を把握出来るものではないな。断片でもいい、何か一つの問題について、或る切迫感といったものを分かち合せて視野が広がればいいな、といふ風に思つてゐます。

私が今日、皆さんに話したく思つてゐる話題は、煎じ詰めて言えば、一つだけと言つても過言ではないかも知れません。私が話したいのは、「実時間」といふ事です。「実時間」といふのは、その時間、リアルタイムという意味で言つたりします。私は近年ずっと、その事について考へてゐるんです。この実時間くらい軽視されて、「何事も起きない」と考へられてゐる時間はないのではなからうかといふ風に思ふんです。例えば、今はさつきの続き、明日は今日の続き、来年は今年の続きといふ風な形

で、私の言葉で言つと「慣性の法則」のようなものが常に支配してゐるように思ひます。この「慣性の法則」といふのは物理学用語で「イナーシャ」と言ひますが、英語で言つと、もっと広い意味があつて、「不活発」だとか「惰性」だとかいふ風な意味もあります。この「慣性の法則」みたいなものが、実は私たちの「実時間」を常に支配してゐるんだといふ気がしてゐます。例えば私が毎日、酒を飲んでゐるとしまししょう。これも又、「イナーシャ」です。毎日飲んでいればさほどの深刻さを感じない訳です。今日はその「実時間の大切さ」といふことについて話してみようと思つてゐます。それとも一つ。作家や学者、芸術家、職人さんも含めた沢山の我々の先輩達、或いはマスコミが、「実時間」において、どれだけ本当に歴史の重要性を感じて生きてきたのか、といふ事を考へてみたいと思ひます。

話が前後しますが、私は今からちようど三〇年前の一九七〇年に就職しました。大学を一九六八年に卒業してゐたのですけれども、在学中に中国語の教師もしてゐましたし、遊んでゐましたので、就職が遅れました。就職が遅れるといふ事を、さほど疑問にも思わなかつたのですけれども、共同通信といふ通信社の記者にたまたま一九七〇年になつた訳です。七〇年といふと、七〇年安保



もありましたし、一つの区切りの年だった訳です。私は学生時代に中国語をやっていましたので、就職して直ぐの配属先が横浜だったのです。皆さんもご存知の通り、横浜っていうのは、日本で一番多く中国人たちが住んでいた場所です。私は中国語に非常に興味があったし、中

国語の教師もやりましたから、しょっちゅう中華街に行っていました。そこに、華僑を讀者とした中国語の新聞を発行しているお爺さんが居まして、その人に私は「新聞記者になったのですけども、どのような事に注意したらいいのか」とお尋ねしました。そうしたらそのお爺さんは、「見えない像を見なさい、聞こえない音を聞きなさい」という風におっしゃられました。何というか、まるで禅問答のような事をおっしゃった訳です。当時、私は二〇代半ばの非常に若い時期で、血気にはやっていました。血気にはやっていたという、その頃の、一九七〇年代の日本では、連合赤軍の事件があったり、今は性質の違う警察の事件が沢山あった訳です。私は、そこで特ダネを取りたかった訳です。そのお爺さんが言ってくれた、「見えない像を見ろ、聞こえない音を聞け」という金言のようなものを直ぐに忘れ、私は功を焦って神奈川県警に入り、随分色々な仕事をしました。はつきり言って、警察の言いなりになって行動してきました。今から思えば赤面せざるをえない事も随分したように思っています。私は一九九六年の末に会社を辞めた訳ですが、その頃になって初めて「見えない像を見ろ、聞こえない音を聞け」と言われた事の意味が分かったような気がするんです。その意味は多分こういう事ではないでしょう

か。今、つまり「実時間」の中には見えないものがある。派手派手しい報道とか派手派手しい色々な人の声の影に隠れて、小さいけれども非常に大事な動きがある。そういうものにもっと想像力の射程距離みたいなものをのばしていった方がいいんじゃないか、そういう事ではないかと思うんです。テレビとかマスコミで喧伝されている事が必ずしも世界で一番重要な事ではないのだ、という事を言っていると私は思うんです。それを「後知恵」として判断する事は誰にでも出来ます。

でも、数は少ないですけども、そうした「後知恵」ではない事例もあったことは確かです。私はやはり、そうした事例というのは、その時点―たった今にあつて危険を察知するとか人々の不安の根源を探るとか、或いは今の時点で危険を予知していくという事ではないのかという風に考えています。

「三点凝視」の眼差し

果してこういう場所で引き合いに出していいのかと思うんですが、私は毎週、何度も東京拘置所に行っています。ここには、言ってみれば色んな「逆賊」っていうんでしょうか、犯罪をやらかした人間が沢山入っている訳です。そこに行つて私は、ある青年に面会している訳で

す。その人は一〇年程前に複数の人間を殺した人です。今、二〇代の後半で、殺人を犯した段階では未成年です。私は警察の記者を長くやっています、警察が本来どんなものであるか、特に神奈川県警の裏側はよく知っていますんですけど、それでもある種の偏見があつたんじゃないかなという風に思うんです。その青年と話しているうちに、「四人も人を殺している結果だけを見て、その人間のイメージを割り出す事は出来るのだろうか」と、そういう風に私は考えるようになりました。会う前から、分厚い調書、それから公判資料、裁判資料をみんな私は読んでいった訳です。それから彼に関するあらゆる週刊誌や新聞の記事を集めて読みました。そうするとですね、イメージが一つ出来るじゃないですか。そこには「けだもの」だとか「非道」だとか「残虐」だとか、あらゆる罵詈雑言が書いてある訳ですから、そう思いこんで私も行く訳ですよ。しかし、実際に彼に会つて話をしていくうちに、ものを書く人間として根本から反省を迫られざるをえない、そういう経験をしたんです。透明板の向こうに座っている青年は、私が想像していた人間と全く違つていた訳です。重ねると何一〇センチにもなるような資料を読んでいったにも関わらず、一つもその人間の像をとらえられていない。言葉つて一体何なんだろうと思

つたわけです。彼と話をして感じる事は、彼と同世代の人間でこれほどのを深く考え、記憶を大事にする人間はそうはいないということです。それは不思議なことであり、私にはうれしい発見でもあるわけです。

私の言いたいことは、いろいろな不幸の連鎖があると、いうことです。例えば「この人間が確実に罪を犯す」ということはありえない。彼と話していると、殺人を犯した彼と私は、紙一重だと感じています。今、彼は多くの人を殺したことを根底から反省しています。彼は皆さんと同じように、すばらしいことを考える共鳴板を持っていたんです。私は彼に手紙を書く時、彼が辛いと思うので本件には触れません。ですから「一〇代の時、何に感動したか」という聞き方をするんです。その返事が非常に興味深いものでした。彼はビデオショップでアルバイトをしていたそうなんです。その時に、涙が止まらないくらい感動したことがあるそうなんです。それはチャップリンの「タイムライト」という映画です。おそらく、この講演を聞いている人のほとんどは、この映画を見たことがないでしょう。彼は、こんなすばらしい映画があるとは思わなかったと言いました。その映画を見たのは殺人を犯す前のことです。私もチャップリンの映画は見ているのですが、忘れてしまいました。さして感動して

いないということですか。彼の話聞いてからビデオを借りて見てみました。そしたらすごいなと思うわけです。

その映画の内容はこういうものでした。障害をもったバレリーナが自殺しようとしています。それを大道芸人であるチャップリンが助けるんです。自殺をさせないように懸命に励まし、その女性を再び舞台上に立たせます。その映画は彼女がブリマドンナになっていく過程、大道芸人のチャップリンが零落していく悲しみを見事に描いています。それを殺人を犯した彼が、深く解釈していることに私は気が付いたんです。

先程、彼は殺人を犯したことを反省していると言いました。しかし、実時間にあつてはそうではなかった。青年特有の狂乱があつたんですね。躁状態で情緒が不安定それに加えてエネルギーが有り余っていた。その中で様々な不幸の偶然が重なり、殺人を犯してしまふんです。これは極端な例です。歴史認識に対して、殺人の被告人をなぞらえるのはおかしいかもしれませんが、極限のところではそうでもあると思うわけです。歴史が急速に変わっていくとき、それに安直に乗っていかないためには、むしろ鬱状態であるほうがいいのではないかと思うわけです。そのことは彼に話していませんが、皆さんにしても、実時間における判断を問われていないよ

うで、実は刻一刻と問われているのではないのでしょうか。

もう一つエピソードを紹介したいと思います。菊池寛という作家がいます。私ははっきり言って、この人が好きではないですが。彼は一九一〇年代に「死者を噛ふ」という小編小説を書いているんです。非常に単純な小説で三〇枚くらいにしかありません。ある日、東京の江戸川で女性の水死体が浮かびます。それは、自殺体です。川の兩岸と橋には、野次馬で黒山の人だかりができています。菊池寛はそこを通りかかります。そして驚くべき光景を目にします。消防団だと思んですが、その遺体を手搔棒で引き寄せ、丘に上げようとします。しかし水死体は非常に重いため、途中まで引き上げても落ちてしまうんです。その遺体が落ちるたびに、つめかけた人々はゲラゲラと笑う訳です。それを見た菊池寛は、「野卑なことだ」と嘆きます。これだけの話であればどうってことのない小説だと思っんです。

小説の中で、菊池寛の視線は二通り注がれています。一つは事件の当事者である女性の水死体に注がれています。その女性の死体がどうなっているのかというと、男性用の股引をはいているんです。彼は、それにいたく感動します。菊池寛は、自殺した女性が死後の自分の姿を想像し、たしなみとして裾が乱れぬように股引をはいた



のだと推測するわけです。そのように風景の中心に向かう彼の視線があります。もう一つの視線は群衆に対して注がれています。私は、今日の講演で実時間における群衆のことを特に言いたいです。群衆あるいは民衆、市民、野次馬、世間と言ってもいい。

菊池寛の小説には、さらにもう一つ視線があるんです。

私はこれを「三点凝視」と呼んでいます。その三つ目の視点は、自分つまり菊池寛自身に注がれている。菊池寛は群衆に対して憤ると同時に、内心笑いたくなるような心理は自分にもあると反省する訳です。猟奇的な心は自分にもあると。これがこの小説のオチです。バスジャックの事件に例えると、一つ目はバスジャックの犯人、二つ目は報道とか世間の目に注がれている。もう一つは「自分」に注がれる。私はその「自分」に注がれる視点が大事だと思っんです。

それは一九一〇年代の話であって、皆さんは、その光景をみても笑わないというかもしれない。しかし、一昨年の九月にこんなことがありました。雨の日だったと記憶していますが、マンシヨンの屋上から皆さんと同年齢にみえる男性が飛び降りようとしているんです。私は山谷という宿泊場街の近くに住んでいるんですが、その付近の国道四号線沿いのマンシヨンでした。その男性は、柵を乗り越えて縁のところまで来て、高板飛び込みの選手のような格好で今にも飛び降りようとしているんです。その上空には警視庁のヘリが飛び、地上では救急隊員がネットをはっているんです。付近には野次馬が数千人集まり、それを見えています。そして私は、その光景を馬鹿なこと三時間も見ていました。男性は、救急隊員がは

っているネットのないところに飛び降りようとする訳です。その度に、下にいる人々は「早く降りてきなさい」と言ったりする訳です。そのように始めは「止めろ、止めろ」と言っていた野次馬も、一〇分経ち、二〇分経つと、そのうち焦れてくるんです。そして一人の男性がこう言ったんです。「こっちも忙しいから早くやってくれ」と。そして、これが大うけです。周りの野次馬も「そうだ、そうだ」と言うんです。そして次目についたのは女子高生が母親に電話をしている様子です。その女子高生は電話の向こうの母親に「これテレビでやってる？」とか「今から落っこちるのよ」と話しているんです。他にも「せーの」とかけ声をかけるやつがいました。下で見ている野次馬たちはもう、「自殺しなかつたらただじゃおかないぞ」といった雰囲気なんです。私は、上にいる彼には飛び降りをやめる、翻意する権利があると思うんです。ところが下にいる群衆はそれを許さない。小説の終わり方でアンチクライマックスというものがありません。ドラマタイズされたカタルシスではなく、尻すばみの終わり方を言います。下にいる人々はそのような結末を絶対に許さない雰囲気なんです。群衆はすごいなと思いました。

しかし、何時間も経つうちに、私も「彼がこのまま降

りてきたら、「たまらないな」と思っていたのです。それから抑制しようもなく、ある想像力を働かしてしまうわけです。そんな想像はやめようと自分に言い聞かせても、なかなかおさえられません。その想像はこんなものです。そのマンシヨンの近くには桜の並木があります。桜の木はかたいものです。そこに彼が放物線を描いて落ちてきて、モズの生煮えみたいに突き刺さるといふ光景です。「助かつて欲しい、世間は酷いな」といふ気持ちがある反面、「このまま降りてきたらただじゃおかないぞ」といふ気持ちもある。さつき紹介した菊池寛の小説とどこか似ていると思うんです。

何か歴史的な騒乱状態にある時、そこに自分が立ち会った時のものの考え方があると思うんです。それは視線を一方方向だけでなく多方向に向けること、つまり自身身に注ぐ眼差しを持つことだと思ふんです。現在、すぐく安っぽい平板な「善」とか「正義」とかが羽振りを利用してはいるわけですけども、私は決して人間つていうのはそうではないなと思ふんです。実時間―たつた今の判断というのとはとても難しい。その実時間における民衆やジャーナリズム、マスコミというものの危うさが今ほど目立つ時代というのではないのかと考えています。

「九九年問題」を実時間でどう判断してきたか

私も元々はマスコミにいて、今は独立したものの書きになっているわけですけども、近年の歴史的な動きを見てみると、私たちは本当に実時間で判断してきたのかとつくづく思うわけです。

例えば九九年の夏の国会、一四五通常国会というものがありません。この話を逐条的にやるつもりはありません。ただ私はここではつきり言っておきたいと思うので、すけれども、去年の夏の国会で決まったいくつかの法律は、後になって確実に、一〇年後二〇年後にゴチックで歴史の年表に載るだろうと思ひます。でも、社会全体は「そんなにたいしたことないだろう」という中で実時間を過ごしてきたらうと私は思ふんです。例えば周辺事態法という、いわゆる新しいガイドライン関連法があります。それから国旗・国歌法もまた成立しました。三つ目は盗聴法。警察が合法的に人の電話を盗聴できるものです。四つ目は改正住民基本台帳法です。これはもう完全な国民総番号制に通じる動きではないかと私は思っています。他にも憲法調査会を国会内に設置したというのもそうです。他にも憲法調査会を国会内に設置したというのもそうです。他にも憲法調査会を国会内に設置したというのもそうです。いづれの法案や法律も、戦後五〇数年間なんとかしてこの国が阻んできたものだったのです。それが去年の夏の時

点で一挙に、堤防が決壊するように成立していきました。ところが、実際の実時間においてはそうは見えていないんです。私たちが見てきたものというのは、相も変わらず猟奇的な事件であるとか毒入りカレーの事件であるとか、あるいは凶悪な少年犯罪とかであって、そういうものがまるで「国家存亡の危機」であるかのように扱われてきた訳です。

私は、これらの法案というのは全体として国家が社会を飲み尽くすような動きだという風に思っています。本来なら自由であるべき個々皆さんひとりひとりに異なった内面というものがあられるわけですけども、そこに強引に国というものが土足で踏み込んでくるという印象を私はもっています。いってしまえば、「私は政治嫌いだからそんなもの関係ないよ」と言って、「庭の花が散つたの咲いたのという小説を書いてりやそれでいい」というものではないんですけども、そうはいかない。なぜかといえば、本来私は勝手に生きたいのに、どうもそれを許さないような雰囲気になってきているからです。

それから、いま石原さんが東京都知事になっています。西と東で多少の温度差があるのではないかと私は思うんですが、同じ「知事」という名前がついていても、あのノックさんという人は相当やばい人だなと思うけども、

東京の知事の方は「やばさ」が違う訳です。私はノックさんよりも東京の知事の方がよほど怖いんです。かなり乱暴な人だと思えます。「大阪の知事さんは下半身に問題があったけども、東京の知事は上半身に問題がある」と言ったらすごく怒られましたけども、本当は今でもそう思っています。かつてはあのような人は「エキセントリック」で済んでいました。ところが、いま彼は絶大な人気をもっている。そこに少し注意をむけていた方がいいと思うんです。

去年の夏の国会で決まったことを「九九年問題」と私は言っていますが、実をいうと九七年の時点から私はずっと言い続けてきたんです。これをなぜ私が口をすっぱくして言い続けてきたかといいますと、それらの法案によつてこの国の近未来あるいは中期的な未来の形が決まっちゃったからなんです。六〇年安保の一〇〇倍も危険な法案が周辺事態法、新しいガイドラインだと私は思っています。地理的にも何にも限定していない上に、単に自衛隊だけでなく民間レベルもふくめて半強制的にこの国がアメリカの戦争に関わらざるを得ないわけです。「SAPIO」という雑誌の中で、石原都知事は小林よしのりという漫画家と対談してこう言っています。「中国は核をもっているわけだから、それがもとで中国とい



う国が減びるかもしれない。有事の際には、私は東京都知事として、「都の施設で防衛に必要なものは全部使ってくれ」と言うつもりである。自治体はやっぱり命を投げ出すぐらいの覚悟が必要である」こういう風に彼は公言してはばからないわけです。ここに、周辺事態法とかガイドラインの動きの象徴的な本質というのがでていると私は思うんです。

これだけではない。みなさん断片的にはお聞きでしょうけども、彼の「三国人」発言というものがありません。これもまた私は非常に許しがたい発言だなあと思っているんです。でも彼にとってはこれって日常会話なんですよ。まったく通常の会話です。これをどういふ場合に彼

が発言したかというところ、今年の四月九日に行われた自衛隊の練馬駐屯地の創設記念日で挨拶した時なんです。若い自衛隊員でさえも聞いててギョツとするぐらいで、それぐらい彼の意図が分からなかった。それほど彼の発言だったんです。

彼が言ったのはこういうことなんです。「今の東京を見ると、不法入国している多くの「三国人」、外国人が非常に凶悪な犯罪を繰り返している。こういう状況で大きな災害が起きたとき、非常に大きな「騒擾事件」が想定される。いわゆる「三国人」が大騒ぎを起こすだろう」要するに、阪神大震災のような震災に便乗して彼らが騒ぐだろうと言っているわけです。だからこそ彼は、「皆さんにも出動を願って、災害の救急だけでなく、やはり治安の維持も皆さんの大きな目的として遂行してもらいたい」と言っているんです。

彼はいま九月三日ということをしよつちゆういろんな所で言っています。九月三日というのは日本の戦後でも初めての、「国民」のための非常に大きな行事があります。これは何かというと、いつのまにか彼は自衛隊を軍隊にしているわけですけども、その「国民の軍隊」の演習があるということなんです。震災だけでなく、彼が言うところの「三国人」たちが騒ぎ出す事を想定した、

治安維持も含めた訓練もするというのが九月三日だという風に言うわけです。この事を彼は大いに宣伝していました。私はびつくりしてしまいました。これが戦前にいわれた話だったら、例えば私が歴史の本でも読んで言うんだつたら分かります。でもこれは今―実時間にあつて言われているんです。たしかに、こういった事も石原慎太郎であればある程度は想像がついていたことではあります。でも、もつと驚くべきことは、こういう発言に対する非難の声というのがあまり無かつたことです。ここに集まつておられる方の大半がこの発言に疑問を感じておられると思うんですけども、実は都庁にきたFAXの七割近くが賛成しているんです。むしろ、これを批判的に報じたマスコミが非難されているんです。私はそのことに非常にびつくりしました。

かつての彼は、西村元防衛政務次官なんかと一緒に街宣車に乗って右翼まがいのことをしたりして、自民党内でも暴れん坊で眉をひそめられたぐらいの人だったんです。これまでそういう意識でいたのに、今や大変な人気になっていく。皆さんご存知だと思いますけども、今度の選挙で自民党がずいぶん票数を減らしています。で、はつきり言つて戦後の自民党というのは解体の過程であると言われているわけです。それじゃあその解体の過程

のなかで自民党に失望した部分はどこに流れていったのか。野党に流れていったのか、あるいは革新政党に流れていったのか。そうじゃないんですね。自民党の解体とともに、いわばネオファシスト的な勢力がどんどん力を増しているという風に言われているんです。むしろ自民党に失望し始めた世間の欲求不満というものを石原慎太郎が一身に吸収し始めていると、そういう風に言われているわけです。不思議な現象であります。それって、まったく同じというわけじゃないけども、オーストリアの自由党党首であるハイダーやフランスのルペン、あるいはロシアのジリノフスキーみたいな、そういう「人気者たち」の現象にどこか似ているのではないかなと私は思ったりするわけです。

私が一番言いたいのは、実時間にあつてどうしてこんなことが起きるのかということなんです。「九九年問題」について私はこう言いました―これらの法案が、一〇年後二〇年後には確実に歴史の教科書に「非常に反省的に」記されるだろうと。要するに、「九九年にはこういうことがおきて、今日の悲惨な情況というのが生まれたんだ」という形で、二〇年後、四半世紀後ぐらいにゴチツクで歴史の教科書に記されるのではないかと、そういう風に私は予想しているわけです。私が言いたいのはそ

のことなんです。今までだって、戦前戦中を通して実時間には大変なおきてきたけども、いつも翼賛的な動きでした。マスコミもまたそうです。「後知恵」としてならば戦後民主主義というものが日本にはもちろんあったわけだけでも、それではしょうがない。たくさんの人間が死んでから、たくさんの人間が犠牲になってから反省するんでは全く意味がないのではないかと思うんです。むしろ戦前戦中の反省にたつて実時間というものをもっと冷めた目で、冷静な目でみていく眼差しというものがですね、さっき言った「三点凝視」のような眼差しというものが必要ではないのかと思っっているわけです。

私は、石原慎太郎さんを人物としてあまり大きな人間だという風にはもちろん思っけません。こういうことがありました。たしか八四年だったと思うんですけども、日本と南アフリカの友好議員連盟というものができました。当時の南アですから、まだアパルトヘイトを反省する前です。彼はその友好議員連盟の幹事長をやっています。そして彼は公然とアパルトヘイトを支持していました。今の情況は石原さんのそのようなところを見ている。初期ファシズムというものに非常に似ているなと私は思うんです。例えば彼は外形標準課税のような、独占的な金融機関がもうけるものに対しては反対したり

する。一見すると彼は弱者の味方のような行為をしたりするわけです。しかも反米でもあるし、非常にわかりやすい。それから、日本に於ける「不法滞在外国人」が増えているわけですが、そういうことに対するそこはかかない世間の不安みtainなものをうまく彼は回収していく。そこに、火に油を注ぐような形の発言をして煽っていく。そうしたことをもつと深い眼差しで見えていく必要があると思うんです。皮肉なことですが、自民党の解体過程とともに日本のファシズム化が進んでいるといっても過言ではないと思います。

新しい「ペン部隊」の出現

今、日本に直接選挙で首相を選ぶ「公選制」が導入されたら、誰が当選すると思いますか。東京で言われているのは圧倒的多数で石原慎太郎が当選すると言われているんです。中国を「支那」とよぶ。中国人を「支那人」とよぶ。北朝鮮を「北鮮」という。北朝鮮の人々を「鮮人」といったりする。現在、南北の大変な歴史的な会談が行われているにも関わらず、相変わらず北朝鮮を敵視して、「戦争に命を投げ出すくらい覚悟が必要である」という発言をするような人間が首相になっていく可能性が大いにあるわけです。私は本当にあると思っっています。

で、こういう人を世間が応援しているだけではない、マスコミもまた応援してゐる。事に私は本当に驚き入るわけです。私はもの書きですから、いろんな所からコメントを求められるわけですね。例えば石原の「三国人」発言の時も、私は朝日からコメントを求められました。そういうときにうつかりしたことを言いたくないなと思うんです。だから一生懸命考えます。世間に乗せられた、今の時勢や時の勢いに便乗したような発言だけは止めよう、という風に思っているんです。

ここに私がいつも大事にしている写真があります。これは一九三八年当時の写真なんです。一九三八年というのはですね、ヒトラーが、ナチスドイツがオーストリアを併合した年なんです。その前年に日本は盧溝橋事件を起こしている。それをきっかけに中国での戦争は全面的に展開していったわけです。それからその前の年、三十七年の一月には南京大虐殺が行われている。当時、一般的に大虐殺をやったという風には知らされていないけれども、「何か大変なことがあったらしい」というふうには知らされている。で、三十七年の四月にはですね、ピカソの絵で有名なゲルニカの爆撃が起こったりしています。三〇年代の中国っていうと、一般の民衆は牛馬と同じような本当に貧しい生活をしている。そこに、工業力

をつけた日本が大挙して押し寄せてくる、それを一々提灯行列なんかして喜んでゐる。でも今、戦後の歴史の中ではそれが侵略だといわれている。二度とこういう事はあるまい、という風に皆さんは思うかもしれない。それから、その当時には心有る作家や歌人、画家達は「あれは大変な侵略である」と考えていたに違いない、みんなそれに対して苦々しい思いでいたに違いない、そういう風に思うかもしれない。でも調べれば調べるほど、そんなことは無いんですね。九九・九%の芸術家達、表現者達、マスコミの人間達がですね、侵略なんて全然思っちゃいない、侵略なんて言葉も無い。むしろ、自ら戦争を支えていくような報道をし、そういう絵を描く、それからそういう詩をつくり、そういう小説やリポートを書いてきた。さつき私はすごく肯定的に話したわけですが、菊池寛という人がいました。私もいま入っている文芸家協会で、彼は会長だったわけですが、彼は軍部からある話を持ちかけられる。三八年の夏であります。日本陸軍が漢江—中国のですね、武漢のほうを攻略しようとする作戦が立てられたわけです。その、日本の陸軍伸るか反るかの作戦に、当時の人気作家を派遣して、天皇陛下の軍隊つまり皇軍を礼賛するような、または賛美する原稿を書かせるっていう企画が持ち上がったわけ



です。それを菊池寛は二つ返事で受けてしまう。で、その時にできたのが「ベン部隊」というものであります。すごく変な名前です。

「ベン部隊」とはベンの部隊、つまりペンで兵隊と同じような働きをする。彼らは一般の兵隊よりもっと罪が深いのではないかと私は考えているわけですから、それに参画したのが当時の一流中の一流、超売れっ子の作家達全員であります。菊池寛が後に書いた手記に拠れば、誰も反対しなかったそうです。彼が「陸軍からこういう要請があったけれども、行ってはくれまいか」と作家達に言うんです。菊池寛は人が悪いですから、さつき言ったようにちよつと物事をシニカルに見てる人であります。ですから何人かはもちろん「作家たるものそんなものはイヤだ」と、あるいは「都合が悪い」とか言って行かないだろうと思っていたら、一人か二人を抜いてむしろ全員「行かせてくれ」という反応であった訳です。で、それが菊池寛、久米正雄、吉川英治それから、白井恭二、この人は戯曲家でもあったし、演出家でもあったし、東大の仏文科なわけですね。私は呆れるわけですけど、東大の仏文科行つてですね、当時のフランスでどういう動きがあったのか知らなかったのか、と聞きたいわけですね。サルトルたちが人民戦線をつくり、反ナ

チの運動をしたりしてゐるのに。日本にはそういう歴史つて本当に無いんですね。亡命者もほとんどいない訳であります。それから佐藤春夫も、私はこの人の詩が結構好きだったわけですけども、でもやっぱりこの人のやつてきた事を考えるとうんざりする。戦争を礼賛する詩を書いたと思つたら、終戦後はまるつきり別の「民主主義」を謳歌する詩を書き始める。そのタイムラグつていうのは数ヶ月しかない。そういう人達がですね、日本の歴史つてものを形作つてゐる。岸田邦夫もそうでありま。それから「放浪記」を書いて私も好きな作家である林文字も、深田久弥さんもそう、児島清次郎、尾崎士郎、滝井耕作もそうであります。いずれにせよ、当時の名だたる作家達がみんなそれに参加してゐるんです。もちろんマスコミもまたそうだと思います。でも、私は今、その人たをなじるという意味でこの話をしてるんじゃないんです。

昔は羽田から中国のほうに向かつたんです。プロペラ機で彼らは行った訳ですけども、私がつてゐる写真はちよつどその壮行会の時のものです。一九三八年の朝日新聞とか毎日新聞の縮刷版をみると、それに関連した写真があるので是非読んで欲しい。大学で授業を数一〇回受けるぐらいのかなりの衝撃があると思うし、私の話

なんかよりはよほどリアリティがあります。どういふ写真かつていうと、菊池寛が前列に立つてゐるわけです。みんな日の丸をもつてる。それから、後ろのほうにはですね、みんな「文芸春秋」つて書かれた旗を持つてる。編集者達、作家達が集まつてゐる。佐藤春夫なんか軍服着たりしてゐる。花束をもつたりしてゐるわけです。これから漢江に行つて兵隊に従軍して、日本兵の勇猛果敢な戦い振り、非常に条件の悪い中でいかに国のために戦つてゐるか、銃後にいる人間、日本にいる人間はもつと頑張らねばいかんという記事なんですけれども、それを書くために行く。

この人達は東大を出て私なんか比べものにならないくらい筆力のある人たちですから、当然何か顔に陰りがあるだろうと思つて私は写真を見る訳です。当時は、これに加わらないと原稿料を貰えないかもしれない。この時流に乗らないと、作家なんて弱いんですから、結局食つていけない。だから嫌々やつてるんだ。そうだとしたらその写真から彼らの表情の「陰り」を見て取れるだろうと思つた訳です。笑つていてもどこか何か歪んでゐるような顔になるじゃないですか。ですから私はそれを探すわけです。でも、ないんですね、そんなものは。全員が、

もうほんとに晴れがましい顔をしている。実際、彼らは晴れがましいという風に思っていたに違いないんです。

陸軍と文芸家協会に選ばれて日本の戦争を美化する記事を書きに行く。そういうレポートを書きに行くってことはいかに素晴らしい仕事なのか「使命感」を持って彼らに行くわけです。私はすごくそこに打たれるっていうんですか、「感動」するわけです。どういう「感動」かというと「俺だったらどうだろうなあ」という「感動」です。私はそんな人気作家じゃないですから、当時その実時間にあつて、私は選ばれる可能性は無いわけだけけれども、でも、仮に選ばれたら、「いや、ちよつとこういうものには行けないな」「信条として、私はちよつと違うんです」と言えただろうか、と思うんです。「私だったらやらなかっただろう」ではなくて、「ああオレだったらやっぱりやつたかも知れない」と思うんです。ペン部隊の一員になって晴れがましい顔をして、あの羽田の飛行場で白い歯出して笑っていたんじゃないかと思うべきだと私は思ってるわけです。そのほうが、勉強になる。実時間というのはそれほど恐ろしいと私は思うんです。

で、あの写真のおぞましさとということでしょうか、例えば私がそこに私の父親を見つければほんとに失望すると思うんです。でもその当時は、そんな風にうけとる

人はいなかったんです。それは何年も経って戦後初めて告発されたわけです。私は国の政策、戦争政策を全面的に支持して行った彼ら、翼賛作家たちは嫌々行った兵士たちよりも、もつと罪深いと思うんです。けれども、それを非難したのは戦後に入ってからなんです。しかも戦後もずいぶん経ってからで、尚かつ非常に不徹底な形でしかやられていない。当時のペン部隊と、ある意味対応するような名称だと思っただけでも、近代文学の人達が「文学検察」なんて名前で、彼らを糾弾したのを私は知っています。それは必要であつたとは思っただけけれども、このネーミングのおぞましさつてのがやっぱりあるな、という風に思うんです。

どうして、実時間に在つてはこの国の戦前戦中つていうのは毅然と戦う人が少ないのか。大変な情勢にあつたことはよくわかります。ただ、一般に言われているように、強権発動があつて、到底抵抗できる情勢ではなかつたから付き従つたんだということとはちよつと訳の違う、むしろ「下からの全体主義」のようなものがですね、常にこの国にはどこかであると思うんです。「自分には絶対ありえない」という風なことではないと思うんです。

今、石原さんを無意識に支持していく層が若い人たちの間で着実に増えています。また、「文芸春秋」という会

社はまるで石原慎太郎の機関誌の様に彼を持ち上げ、宣伝をする。

これってまさに新しいペン部隊だなと私は思うんです。産経新聞もまたそういうことを書いたりする。読売新聞も書いたりする。朝日の一部の記者も石原ファンです。で、それを実時間にあつてどういう風に判断すればいいのか。それが私は非常に大切だと思うんです。「新しいペン部隊のようなもの」これを私はいろんな所で口に出しているわけです。「危ないなあ、危ないなあ」つていう風に思います。そのなかで本当に必要なのは「見えない像」を見るといふ事だと思います。それから「聞こえない声」を聞く事だと思うんです。それから冷静に自分を見つめ、「自己検討」つていうものが必要であるような気がするんです。

私は軽々といろんな物を取捨選択するんだつたらむしろ判断停止して、何もしないほうがまだいくらいに考えている人間です。「だらしなく暮らす、カッコのいいこと言わない、ズルズルと暮らす」ほうがですね、まだまともなのではないかという風に思っています。

「不服従」といふ言葉があります。それがすごく勇ましいことのように、かつては言われたわけです。けれども、そういう風に勇ましくかつこよくする必要も無いん



じゃないかと思つています。もつとだらしなくて、柔らかで、長続きのする不服従つてのがあつてもいいような気がしています。

我々が住んでいるこの国つてのは随分私は病んでるなあっていう風に思うんです。森で言えばですね、丸ごとどつかで根腐れしかかかってきている。で、その腐敗した根つこがどんどん地下だけ拡大していく。いくつかの地上の葉っぱは緑つぽくなつてきているけれども、相当病んだ葉っぱたちが増えている。見えないところでは倒木が始まつている。森全体が倒れているような状況だと思ふん

です。結局我々はしがたない一枚一枚の葉っぱだと言えると思うんです。皆さんも一枚の葉っぱ、私も一枚の葉っぱだと思っんです。ただ散っていくだけでおしまい。でも「悔しいじゃないか」と思わなくていい。隣の葉っぱに自分の意見を喋る、ということも大事だと思います。それはたいした声にはならない、「サラサラ」という声にもならない。ただ森全体で、皆さん一人一人が率直な自分の疑問、自分の不満みたいなのを自分の隣の葉っぱに話し掛ける。そうするとですね、多少根腐りした森で、嫌な森であるかもしれないけど、どこかで緑というもの、を少しずつ取り戻す可能性があるんじゃないかと私は感じてます。それを、大学を卒業したら、就職したらじっくり考えるということではなく、今がものすごく大事であるといっているんです。一枚一枚の、しがたない葉っぱが全体としてザワザワと喋り始めると、結構森が蘇生するかもしれないし、大きな音になるかもしれないという風に私は思っています。では私の話を終わらせて頂きます。ご清聴ありがとうございます。

〈質疑応答〉

司会：質問その他ある方は挙手をなさって指名があったら質問のほうをどうぞ。

質問者一：僕は、ジャーナリズムってなんだろう、ってことをすごく聞きたいんです。僕はジャーナリズムってのは反権力っていうものじゃないかな、と思っんですけど、どうも今のマスコミをみると、決してそうではないような気がするんです。神戸の事件とかオウムの事件とかでも、事実を伝えるっていうのはすごく大切なことだと思っんですけど、だけど、マスコミは操作してる、イメージを作り上げているという疑問を感じるんですが。

辺見氏：ジャーナリズムっていったい何なのか、マスコミっていったい何なのかということは、非常に大事なご指摘であると思います。個人的には、ジャーナリズムは権力をきつちりとチェックをしたり、権力から独立して、言ってみれば反権力的な立場で、運営されるものではないかと思っます。でも現実には、おっしゃっている通りそういう風にはまったくない。「神の国」発言のときに森首相がですね、釈明会見を開きました。これは戦後の記者会見としては珍しいぐらい緊迫した記者会見だったわけですけども、このときに官邸の記者クラブの某社記者が「記者団がこういう風に質問してくるだろうから、政府側はこういう風に対応した方がいい」という指南書を政府側に渡していたといわれています。こ

れはかつてない動きであるわけです。さつき言おうとした、新しいペン部隊のようなものの典型である、という風に思うんです。権力という獣の暴走をチェックするのではなくて、むしろそれに同一化している過程である、と私は考えています。それ以上に非常に大事なものは、戦後のジャーナリズムに無かったのは、資本との関係の問題ではないかということです。戦後の未分化の、あまり発達していない世界では、情報商品という概念があまりなかったわけです。現在はそのような情報も全部商品化が可能である。この日本という社会は、情報商品市場であるといっても過言ではないと思うんです。第一次産業がほとんど壊滅したから就業人口も三%をとつたの昔に割っているわけですよ。で、六〇%以上が大企業、つまり物を作るんじゃないで消費する産業になっている珍しい国だと思ふんです。人工一億を超える国が食料自給率が実質四〇%を割っているんです。そういうことは有史以来初めてだと思ふんです。全き消費列島となり、周辺諸国に対して「お前らが作れ、俺達を買ってやる」という風な国であります。どこか価値観の底が抜けちゃつてゐることは事実だと思ひます。

その国が今一番力を入れているのが、マスコミを含む情報産業ですけれども、そこでははつきり言つて、神戸

の少年事件も、それからガイドライン法も、商品として売り買ひされているんです。結局ニーズとしては面白い情報が優先的に売られ、その中でより猟奇的な事件をもつともつと、という風に求めるのです。その最たる例がオウム事件だったと私は思います。オウムの事件というのは、事件であると同時に、日本の情報商品化社会に衝撃的なカンフル剤になったと言えると思います。そういう観点を私は持たないといけないと思います。今までマスコミ・ジャーナリズム論つていうのは、いい人がやれば、正義感があればマスコミは良くなる、という風な考え方が大半を占めていたと思うんですけど、私は必ずしもそう思つていません。もつとシステムティックになつてきていると考へてます。商品を全部乾いた次元で売り買ひする。だから難しく解らない情報、例えば周辺事態法などは売れない。売れないと察知するとそれを書かない。本当は、いま話題になつてゐる一七歳の人間たちの凶悪な事件よりも、実は周辺事態法の未来像の方が、ものすごく血の匂いがする。大変な悲惨な出来事が待つてゐる、という風に思ふんですけれども、そういう想像力が働かない。それを立ち上げていく、それをシミュレーションするような出力がなく、そして深い論議が必要なんだけれども、イメージで全部圧倒していく。それ

から社会的なヒステリアを作ってしまう。一七歳というキーワードを付けると一七歳がみんな凶悪犯の因子を持つているかのように報道される。女子高生がみんな援助交際をするかのように報道されてしまう。バタフライナイフが全国的に蔓延しているかのように報道されてしまう。皆さんは情報化社会とは言われても、情報市場化社会とは聞いていない。未来に対する予見性が増している、判断力が向上している、という風に盲信しているかもしれないけど、私はむしろ逆ではないかと思えます。私は九六年の末まで、共同通信というところの外商部のデスクをやったんですけども、冷戦崩壊後ぐらいから私の考えることはみんな外れてきました。私はベルリンの壁が崩壊するなんて絶対にないと思ってました。それから天安門事件のような事件なんて絶対にないと思ってました。それからソ連邦が崩壊するなんて絶対にないと思っていました。わたしがすごくビックリした事件ですけれども、中国がベトナムと政治戦争をするなど断じてあり得ないと、実際に起こる一週間前まで思っていました。歴史つて実時間で判断するのは本当に難しい。私が入社した一九七〇年に比べて、今の情報量は恐らく数千倍ぐらいなのかもしれません。

広報経路つていうのはものすごく発達していて、どこ

でも資料をくれるわけです。警察でもそうだし、官公庁はみんなくれます。昔と違つて今は向こう側からくれる。たくさんデータのベースがあるけれども、判断力がどんどん落ちてきている。例えばベルリンの壁が崩壊するなど日本人の誰が予測しましたか？ 三日前まで分からなかったんですよ。それが問題なんです。我々は北京ダックのように、フォアグラのように情報を喰わされてオーパーフローしているんだけど、未来に対する予見性は増していない。哲学も深まっていない。何故か。それは、結局その情報つていうのが各個に商品化された情報媒体だからではないかと思つています。さつき言つた「見えない像」つてそういうことだと思えます。売れなくて目立たないけれども非常に大事な情報がある、という風に私は思つています。それを自分の内面に照らし合わせていくつていうことがとても必要だと思えますし、時代の原理だと思つています。今の彼の質問にちゃんと答えられているかどうか分かりませんが、私ははつきり言つてあらゆるマスメディアを恣意的に美化するというのはちよつと無理がある、と思つています。むしろ日本のマスコミつていうのは一部の些細な例外を除いて、惨憺たる歴史だと思つてですね。一度だつて戦争の歯止めになつたことはない、という風に私は思います。そうい

う意味ではむしろ自分たちの暗い遺産を、歴史の本をもつと掘り起こしていく、例えば三八年の朝日新聞は一体何を書いていたのか、ということの方が大事だし、一九九九年の紙面もいずれば必ず問われる、と感じています。

質問者二：憲法のことについて質問したいと思います。

五月三日の朝日新聞五・三集会に参加させていただいて、辺見さんは読売新聞の改憲賛成記事に対して、すごく否定的な言い方をされたと思うんですけども、僕としては結構、議論の叩き台としてはいいんじゃないかと思えます。辺見さんはそうお考えになっていらつしやらないようなので、そのあたり説明を聞かせて下さい。

辺見氏：すごくすばらしい質問ですね。質問のレベルが高いんですけどどきまぎしています。びっくりしました。私は朝日新聞の神戸支局がですね、赤報隊に襲撃されたのを記念した、朝日のシンポジウムでパネリストとして出ました。そこで苦々しく思ったのは、朝日はマツチポンプ的だなということです。朝日も最近、改憲やむなしというふうになってきているなど紙面から思ったわけですが、私は違う。日本の憲法というのは非常にユニークだと思います。第一章はちよつと気に食わないんです

けども、それ以外は結構ノテンキで良い憲法じゃないかと思つてます。朝日なんかでも憲法については熾烈な議論があると田原総一郎さんがおっしゃっていた。つまり会社が、一私企業が筆をそろえて意見を一つにするなんてことはまず無いと思うわけです。だったら、それを紙面に出してくれと言いたくなるわけです。民主主義という言葉を私はあまり使わないけども、それが民主主義だと思えます。でもそうはならない。「朝日の中にも改憲賛成論者も護憲賛成論者もいるのです」という葛藤を紙面でむき出しにした方がむしろ議論が活性化するでしょう。あなたは「読売でも議論を活性化するたたき台としては良いじゃないか」と言つてた、それはそうだと思う。それ自体には賛成なんです。でもですよ、私は読売とか他の大きな会社に何人か友達がいるんですが、彼らの意見は何にも反映されていない。一度も意見を聞かれていないわけです。会社の中で議論があつても何も反映されない。上の人間が勝手に集まつてやつている。読売はナベツネ（渡邊恒雄）と直結してるかもしれない。ジャイアンツとも直結してるかもしれない。そんな中にも阪神ファンはいるわけです。でもそんなことは全く取り上げられない。私はそれは違うだろうと思うわけです。民主主義とはそんなものではないだろうと。あたか

も、日本の憲法はこうあるべきなんだと読売の数千人の社員が一致した意見であるかのように書くのは阻止されねばならないと思います。あなたの言うようにミニコミと



か小さな新聞が最大公約数的な意見として「自分たちはこう思うんだ、憲法九条問題にはこういう考えだ」とどんどん意見提出していくのはもちろん賛成です。議論の叩き台になると思うし、例えば関大に新聞があるとしたら、その新聞が関大生の間で議論をおこすことを率先してやってみようということについては私は賛成です。ただ読売の場合は全く社内の意見は無視されている、また無視されている現状に対して反発が無くなっている。羊のような集団になつてゐるなと思います。朝日もまたかなり縮こまつている。昔だったらよく上司の胸ぐらつかんでやつたもんですよ。火事、交通事故、殺しなどといった、いわゆる日常の仕事を「冗談じゃない、今は全くそんな気はない」と放り投げて憲法問題について論じようとするわけです。現在はルーティンワーク、日常の仕事の中で議論というものがどんどんおざりになつていく。だから真つ当な議論をどこかで伝承していかなければならないという気がしてゐるんです。この中の何人かの人たちはジャーナリストを目標していると思う。是非ともそういう現場、どんな大きなところでも、どんな小さなところでもいいから、真つ当な議論というものを伝承していつてほしい。一番最初の質問でジャーナリズム論に関して言つてましたけれど、権力というものを常にチェック

する、そういう機能を失ったらジャーナリストである意味がないと思うんです。情報市場化社会といっても、実際そこで生活してるのは血も肉も喜怒哀楽もある人間だから、強者の論理だけじゃなく弱者の立場に立つ恰幅というものが必要じゃないかと私は思っています。だから読売の中での安保論議には、きな臭さというものを感じています。当然安保論議自体はやらなければいけないですけど、もっと社内の少数の意見を具体的に提示していくべきだと考えています。

質問者三：昨年の法案改正について、私個人の意見として全く反対というわけではないんですけど、それに対しての論争が無いということが非常に問題だと思いませんか。先程もお話にありましたようにマスコミが取り上げないという部分も問題だと思いませんか、それよりも社会全体がそういうことに関心が無いということが非常に問題だと思えます。三〇年前とか安保の時と違ってなぜ現在はそういうことに関心が無くなったのかということについて考えを聞かせてください

辺見：僕にとつて今の質問は最大の問題だなと考えているんです。とりあえず、周辺のところからお話したいと

思います。私たちは簡単にファシズムと言ったりする、あるいは全体主義と言ったりする。ただそれは、国や人によって異なるわけです。日本には日本特有の全体主義の特徴というものがあるなと思うんです。資料を精査したわけではないですけども、ヒトラーは日本的なファシズムというのを非常にうらやましがったといえます。なぜかという点強権発動の必要がないからなんです。これは驚くべき見方だと思います。ドイツでは強権発動に依らないと到底できなかったファシズムの特徴というのがあったんですが、ある日本の思想家は「日本にはファシズムは起きないだろう。なぜなら今がそうだからだ」と言っているんです。



では日本流のファシズムとは一体なんなのだろうか。一つには深いところで天皇制に関わるんじゃないかなと思っているわけですけど、もう一つには主体の無さに関わっていると思います。日本には事々に主体がない、顔がない。日本の新聞というのは書いている人の名前が載っていないわけです。近年やつと載せるようになりましたけど、それでももの凄く少ないです。言説が誰のものなのかということをはっきりさせない。群衆として逃げていく。たとえばサリン事件の時に犯人に仕立て上げられた河野さんとも対談したことがありますけども、彼に対する報道は驚くべきデタラメなものを日本全土がやったと言っても過言ではありません。朝日もやったし、共同通信もやりました、読売も週刊誌もやりました。では、あの事件で報道の責任をとって社長が辞めた会社はどこにあるか。そんなところは無い、みんな群衆として処理していく。彼には文章で謝罪しているだけ。個として、人間として恥じるということが無い。そういうシステムがさっき言った関心の無さどこかで繋がってると思えてしまうが、ないんです。戦後の過程というのも、そうだと思うんです。かつて戦争を侵略国として戦ったドイツ、日本、イタリア、スペイン、その中で日本は非常に特殊だと思っんです。日本以外の国の戦後ってというのは、ち

よつとみただけで分かると思っんですけど、新聞や雑誌の題字をほとんど変えるわけですね。変えないとやっていけない、全部生まれ変わらなといけない。そこに、ある種の思想的な断絶というのを意識的にこしらえたのが欧州社会だと思っます。しかし日本は違います。日本は旧来のまま、戦前のものも、戦中のものも、そのまま戦後に残しているわけですね。私が所属する文芸家協会もそうです。基本的な反省というものが何もないんです。不思議なことなんですが、連綿とそれが続いている。これが戦後の日本の民主主義の特徴ではないかと思っんですね。それを私はこういう風に書いたことがあるんです。「鵠のような全体主義」であると。鵠っていうのは奇妙な想像上の化物なわけです。尻尾は虎だが声はつぐみだとか、なんだか訳の分からないものなんです。つまり顔がハッキリしない。日本の民主主義にはそういう傾向があるんですね。主体をハッキリさせない、個として自分を浮き上がらせたり、個として自分を立ち上げようと思っない。だけど自分がないわけじゃない。私があるのすごく大事だと思っことは自分が他と違うと思っことなんです。つまりディファレントであると思っことです。ディファレントであると思っことは、いいことだと思っんです。ところが、この社会ではいつの間にか、ディファレ

ントであることが悪いことだという風になつてゐる。デ
イファレントであることを一所懸命もみ潰してきた戦後
というものがあつたと思ふんです。少々目立つものを追
出してしまふ、閉め出してしまふ。そうではなく、むし
ろデイファレントであることを強調していった方がいい
と思ふ。しかし、もみ潰してきた経緯というものが西暦
二〇〇〇年の現在でも続いている。現状はそれだけでは
説明できない部分もあると思ふんですけど、ある作家は
こう言います。「日本では、民主主義が強権によつて安
楽死してゐるのではないか」と。まさに私はそう思ふん
です。抵抗を嫌う、諍いを嫌う。そういうものが、どん
どん蔓延してきている。その手助けをしているのがマス
メディアだと思ふんです。昨年の国会では一一〇からの
法案が通つてゐるんです。もちろん中にはいい法案もあ
ります。さつきの方がおっしゃるとおり、一番問題なの
は論争が無かつたということです。それには全く賛成で
す。全員が意見を言い、論争する権利があるのに、法案
に反対の人間も賛成の人間も、意見を言えない。六〇年
安保だつたら、今回のガイドライン法の拘束性に比べれ
ば問題性は百分の一だと思ふ。アメリカの言いなりにな
らざるを得ないということを法制化してしまふ。そして、
ガイドラインという政府間合意のほうに憲法より先に立

つてしまふ。その法制化に會わせて有事立法というもの
を小刻みにつくつていく。団体規制法や盗聴法もそうだ
と思つてゐるわけです。石原の発言なんかもそうです。
それらが全部地続きで繋がつてゐる。たとえば私を捕ま
えること、貴方を捕まえることは、警察にとつてみれば
簡単ですよ。カッターナイフ一つ持つてれば凶器準備
罪になる。ホテルに泊まると一東京が暴風雨だつたんで、
ここに来る前日に新大阪のホテルに泊まつたんで、私
はペンネームを使います。それじゃあ警察は有印私文書
偽造だといつて逮捕する。そんな理屈があるかと思ふ。
でもみんな法律だから仕方がないと言ふ。こんな風に警
察が法律を小さいところからお膳立てして、企画して、
そして肥大化させていく。いつの間にか日本は大変な警
察国家になつてゐる。私は七〇年代以来ずつと神奈川県警
を見てきたわけですけど、腐敗は当時からありました。
ああなつたのは私にも責任があると思ひます。日本の論
争のなさ、本当に大事な問題を民衆全体で公然と議論し
ていくことをマスメディアがもみ消してきたように思へ
るんです。本来、ジャーナリズムがつてゐるのは権力と
戦ふんです。今の方の質問は本当に大事だけでも、私
はその質問に対して十全に答へることが出来ない。現在
いろいろの問題があります。冷戦構造の問題つていろいろ

が一つありました。五五年体制の問題もある。だけどそれだけではない、何か底の抜けたような、或いはタガが外れたような、価値観が飛び散ってしまったている、そういう問題が大きくあるように思っています。何にしがみついているのか、どのような価値観を信賴しているのかというのが分からなくなる時代だという風に私は感じています。だからこそ私は議論というのがさしあたつて必要だと思つし、いささか感傷的といつか文学的にいえば、たかが葉っぱ一枚だけれども、枝が落ちるまで喋り続ける、表現し続ける。それも立て板に水じゃなくても、訥々としゃべる、もごもごしゃべる。それで結構だと思つています。なんらかの意思表示が必要だと思つてます。そうじゃないと本当に危ない。私がつてるより実は事態は進行してるんだなと感じます。今の人の質問に半分も答えられてないと思つてですけど、半分は宿題として持ち帰らせてください。

ありがとうございます。今日のお話の中で実時間で
の犯罪という問題が挙げられましたが、なぜそのような
現状になっているかという点で、マスメディアの影響力
の強さが要因の一つとして挙げられると思います。それ
だけではなく、私たちがまたこのような問題に無関心で

はなく、貪欲に知る権利を行使し、ともに考え、ともに
行動していく必要があると確信しました。日本社会は確
実に悪い方向に向かっています。必ず変えていくこと
もできるはず。この講演会がその第一歩となればと思
います。

(へんみ よう・作家)

この講演録は二〇〇〇年七月八日に行われた関大
生協組織委員会主催の講演会を編集したものです。

書評編集委員会

寄稿

濟州島は風（パラム）の島

玄善允



*パラムは多義的である。先ずは、風、噂、女遊び、自動車の空気とカバーする領域は広い。

三月の末に三〇年来の友人二人と連れだって、自転車で韓国の濟州島一周を企てた。

酒の上での法螺話が發端なのだが、まんざら口から出任せというわけでもなかった。そろそろ中年も佳境。引き際も射程に入れ、踏ん切りを付けて人生の再出発としやれこもう。要するに中年男たちが考えそうなことなのである。

しかしこの中年三人男、各人各様に仕事もあれば家庭の事情というものもある。それなりの根回しも必要だし、本人自身の準備も欠くわけにはいかない。誇れるものとは言えば、ワーカーホリック的生活と酒の量くらいなも

の。大学で出会った在日朝鮮人二世同士というわけで気心は知れている。そのうえ、職種も職場も異なる気安さをこれ幸いと、一年に数回、異業種間交流めいた愚痴と慰め合いでこの四半世紀のつきあいが続いてきた。その分、ストレスと酒とタバコで十分以上に体を痛めてる。

仕事絡みで時折ゴルフに通う二人はまだしも、懐事情に加えて時間的にもゴルフどころでないから、腹いせもあつてゴルフ批判の屁理屈をこねるこのわたしなど、体にいいことなど一つもしていない。当然、体力・気力が心配となる。そこで、小手調べに大阪周遊とあいなつた。

奇特な二人は車に自転車を乗せて、大阪の南の果てから北の果てのわが家まではるばるやつてきた。この話に便乗することになった私の妻を含めて総勢四名が、中年の大遠足への出発。先ずは、万博公園から千里ニュータウンを経由して服部緑地。このあたりは大阪でも指折りの緑多い住宅地。折りからの快晴と微風にも助けられ、郊外を快適に疾走する。次いで、普段なら車の排気ガスと雑踏でうんざりのはずの市街地へ突入する。十三を経て梅田、御堂筋から大阪城へと、普段とうつて変わつて閑散とした都心の、それなりの美しさと落ち着いた雰囲気を愉しみながら、川沿いに整備された桜宮公園へ。釣り、ジョギング、球技などと休日を楽しむ下町の人々の

くつろいだ雰囲気に、遙か昔の下町のしつとりとした賑わいを思い出し、中年らしく慰められて着いたのが毛馬の閘門。そこからは淀川の河川敷が京都へ向かつて連続と続く。

川筋は視界が開け、風も水の臭いを含んで潤いがある。それになにより車の心配がない。球技に打ち興じる集団の解放感。焼き肉パーティの笑い声がさんざめく。その暢気さのおこぼれと太陽と風と水の息吹を堪能しながら、スピードを試したり、遅れを取ったメンバーの為に引き返したりと、ツーリングの醍醐味を味わいながら鳥飼大橋に至る。吹き出る汗も川筋特有の風を受けて、一層愉しい。

そしてわが家に無事帰還。初めての大旅行に息絶えだえの我々は、急いで仕込んだ大量のビールで一日の壮挙と、大阪の街の思わぬ快適さを祝うという地元びいきを發揮したのだった。こうした予想以上の成功は自信と期待を膨らませる。予行演習の第二弾は神戸へ、そして琵琶湖一周で小手調べを終え待望の濟州島へと、酔つた勢いの話だけはトントン拍子。

ところが、繰り返しになるが、我らは中年で、この中年というやつ、少しは生活にゆとりが生まれる反面、次々襲ってくる難儀に事欠かない。

折りから、わたしの父の容態が急速に悪化した。尤も、もとよりこの話、いいたしつべのわたしにとつては、父の余命が幾ばくもないという医師の宣告が発端にあつた。この中年の冒険、何処でもいいというわけではなくて、濟州島でなければならなかつた。両親を介してわたしは濟州島と因縁がある。つまり、わたしの故郷(?)というわけで、その故郷制覇というなんとも大袈裟な動機があつたのである。

ところで、その故郷を初めて訪れたのは三〇余年前、高校三年生の夏に野球選手としての旅だつた。満面の星の強烈な印象故に秘かにわたしが「星降る島」と命名した故郷に対する、一分の感激と九分の距離感、疎外感というのが心理的収支勘定であつた。その後四半世紀以上を経て、そういう距離は埋まってしかるべきだろうが、生憎と、心理的な距離どころか物理的、或いは政治的距離によつて、わたしと濟州島は引き裂かれることになる。約二〇年の間、四〇歳になるまでわたしは韓国どころか日本国外に出ることさえ叶わぬ身となつた。暇とお金の問題もあるが、なにより、韓国政府がパスポートを発給してくれなかつたせいである。学生時代のちよつとした政治運動紛いを盾に、わたしは韓国人としての権利一切を剥奪されていたのである。

しかし時代は変わる。とりわけ、韓国の政治状況の變化は著しい。そのおこぼれ頂戴というわけで、四〇歳になつてようやく私はパスポートを頂戴した。しかし、だからといって直ちに「暇の故郷」へとおもむきはしなかつた。恐怖心の残滓もあつた。友人・知人が彼の地でスパイ容疑で酷い目にあつたのは、わたしにとつて未だに昨日今日のように生々しかつたのである。しかも、その二〇年は私に様々な現実を教えていた。祖国に恋する余裕がないどころか、父と故郷の人々との軋轢、さらには祖国を口にする輩のおぞましさを目にしたり耳にすることが重なつていた。要するに若かりし頃のロマンチズムには大きな影がさし、白けていたのである。しかし、二〇年待ちに待つたパスポート、利用しない手はない。フランス語を教えて生計を立てている身なのだから、せめて生涯に一度くらいは現地へと、フランスへ旅立つことにした。尤も、憧憬などというものもすっかり消え失せていた。ただただ見て回り、現地を知らないまがいの教師の負い目を軽減するという、いわばアリバイ証明のためにフランスを歩き回つたのである。

当然のこと、本で学んできた知識の生半可を思い知らされる。それは同時に、二〇年の間に失われた可能性の再認に他ならず、研究まがいを決定的に断念する契機と

もなった。

ところで濟州島なのだが、その旅の途中、わたしはフランスの片田舎に留学中の従姉妹（濟州島で生まれ育ち、ソウルの大学からフランスへ）をはるばる訪ねた。夜行列車を乗り継ぎ、ようやく朝方にその田舎町に着いたときには疲労こんばいで、時間つぶしに立ち寄った喫茶店では下痢のために便器を汚してしまふ始末。その店を逃げるように後にして、待ち合わせの場所に急いだ。そこは旧市街の奥の小さな広場。薄汚れて暗くて狭い路地を抜けて、その広場に出たとたん、向こうから小さな女の子が駆けつける。ぶあついセーターとマフラーに埋まるようなその子の顔に浮かぶ、驚きを交えた微笑みを見て、わたしの秘かなこだわりは溶解した。まさに我が一族の顔。化粧気がなく瘦せて貧相な面もちはまさにわたしのものであった。思わず笑顔を返していた。

ところで、溶解したこだわりというのはこうである。韓国への往来が可能になるや、故郷に錦をといて、父は日本で必死になつて稼いだだけのお金を祖国に持ち込んだ。小さなわが家の一室を埋め尽くす物資の山を見て、わが家にこれだけのお金があるのかと、驚き、そして喜んだ無邪気さを思い出すと我ながら微笑ましい。しかし、その後に、僕らをさておいて、見ず知らずの親

戚の為にお金のやりくりを奔走する父、そしてその父に喜んで協力する母が疎ましかった。それは不可解を通り越して、妬みにまで至っていたことを覚えている。ともかく、薬品から衣類にいたるまで、ありとあらゆるものを父は故郷に持ち込み、換金して親族にばらまき、さらには險の故郷で念願の畑を手に入れたのである。そのばらまかれたお金のおかげもあって留学にいたつたはずの「幸福なお嬢さん」の生活を見て、アルバイトに明け暮れ、フランスへの留学など夢物語であつた意趣晴らしをするという魂胆もあつたのである。しかし、「血」というものは恐ろしい。「オッパ」（兄さん）という呼びかけはてきめんであつた。

目に付くものとは言えば片隅のギターだけという、まるで娘さんらしくない殺風景な小さなスチューヂオは、彼女の慎ましい留学生生活を物語っており、それもまた私を喜ばせた。あり得たかも知れない己の姿を彼女に見るという心理もあつたのかもしれない。話し相手に不自由していたこともあつたのだろうが、その従姉妹とわたしは二日間にわたつて、フランス語に韓国語を交えて連綿と話を続けたのだつた。彼女は長旅疲れに加えて、タバコと酒をとぎらせないわたしを心配し、少しでも口に合いたるを癒せるものをと、小さな台所で、韓国料理の五目野

菜炒め（雑菜）、のり巻、味噌汁を振る舞ってくれた。そして別れ際には、長い道中での口しのぎの為にと、たくさんのゆで卵を手渡しし、繰り返し言うのだった。濟州島の「クン・オッパ」（長兄）が待っている、話したいことが一杯あるって。是非訪れて下さい、と。

こうして、思いもせぬことに、フランスのそれも片田舎で、わたしと濟州島の距離は一気に縮まったわけである。

それが機縁となってわたしの濟州島通いが始まったのだが、もとより、その時期は熟していた。かの地の親戚はもとより腹違いの弟妹、そしてその母親達との込み入った関係を父の生前に解決しなければ、というのが、長年その件で胸を痛めてきた母のたつての願いであったし、わたし自身にしても、近い将来に訪れるはずの父の死を念頭にいれて、その後の問題処理の為に、長年の無関心の装いを捨てざるをえない局面に立ちいたっていた。予め一定の信頼関係をつくっておかねば二進も三進もいくまいという打算も働いていた。

こうして年一回、旧盆の直前の墓掃除が私の年中行事となった。これを濟州島では「ボルチョ（草刈り）」と呼び、一年の最大の行事となっている。約一五メートル四方の石垣に囲まれた中央に土饅頭がある。その石垣の内

外の草刈りを済ませて盆を迎える準備をするのだが、数代に遡って、しかも島の随所に散らばる十数カ所の土饅頭の掃除は並大抵ではない。そのために韓国全土ばかりか日本やアメリカ等に散らばった一族が集まるのだが、経費もかかるし面倒である。というわけで、それを差配する役目を負った濟州島在住の子孫にとって頭が痛い。当然、それに絡んでの親戚同士の軋轢の噂は引きも切らない。しかし、それでもなお統けるのは、それだけに思い入れの強い行事であるということにもなる。財政援助はもとより、そこで共に汗を流して初めて一族のまっとうな一員にもなれるというわけである。

とは言うものの、わたし個人に限れば、草刈り自体は楽しい。大阪の街で生まれ育った身にしてみれば、自然の中を歩き回って共同で汗を流すのは珍しく、この歳で初めて野遊びの悦びを知るといった気分にもなれる。道なき道に立ち往生を繰り返しながら、ついに見つけた墓、それを丁寧に掃除した後で、土にひれ伏して土饅頭に礼を捧げるうちに、大気の中で歴史のつながりを感じたような厳肅な気分浸される。時折聞こえる野生の鹿の鳴き声を肴に土地の焼酎でのどを潤すのもこれまた嬉しい。

しかも、そこでは思わぬ発見もあった。長年の酒歴に



加えて、晩年になって、解決をつけねばならない問題の山積に右往左往し、そのせいでますます酒に溺れてすっかり心身をこわしているはずの父が、この野に出ると颯爽、土地の人でも見つけだすのに難儀する墓を、勘鋭く方向を定めて飛ぶように進んでいく。その表情にはわたしたち子供が日本では長年お目にかかったことがない透明感と充実感がある。しかしそれだけに、父は農民で、それも実に勤勉な農民でありえたのに、とか、そのままこの地に生きることができていけば、彼が抱えた問題の多くが生じはしなかったのに、などと日韓のみならず歴史一般の残酷な方に思いを巡らせ感傷に耽つたりということもあつた。

しかし、草刈り以外には、濟州島は苦痛の募る場所ではなかつた。父の責任で処理する、お前は一切口出しならぬ、ひたすら見続けるだけ、というのが母の厳しいお達しで、次々と問題を見せつけられながら、手をこまねくことを強いられていた。祖国の制度、人間関係、とりわけ在日に対するその酷薄さ、そしてそれと比例して、解決しようのない問題を紛らわすために酒に溺れる父の姿に殆ど終日つき合いながら、思わず涙をこらえきれないこともあつた。

というわけで、新婚旅行のメッカ濟州島の美しさに包まれながら、たとえ少しは観光の真似事をするにしても、美しければ美しいほど辛さがつる。その自然の豊かさを享受する境遇は永遠にわたしには訪れないのではとの僻みまで、ほとんど固定観念になりつつあつた。

しかしそうだからこそ、この濟州島の美しさをそのままに享受したい、そしてその経験を担保にして予想される難事に対する自信をというのが、濟州島自転車旅行の企ての大きな動機であつたのである。その美を堪能することすなわち、故郷の征服になるというように、馬鹿げた意味あいまで付与するに至っていたのである。

というわけで、わたしの気は急いでいた。ところがいつだつてこちらの予想よりも事態は先行す

る。余命の短さを覚悟したのか、ついに遺書を認めることに同意した父の衰弱は一挙に進み、遺言書を正式文書にした翌日には激痛を訴えて、緊急入院。兄弟がやりくりしての付き添いその他で翻弄され、あげくのはては、父の死を待ち望む心境にいたる。しかも、障壁はわたしだけに立ちはだかったわけではなかった。同行予定の呉君のほうでもまた、先年来の母上の病状が著しく深化し、遊びのために家を空けるなんてとんでもないという状況になった。

要するに、大阪周遊を除いて何一つ実現しないままに、計画が完全に頓挫した。それがおよそ2年前の話である。

大阪周遊の三カ月後の大晦日、父が亡くなった。事後処理は、韓国を相手にすれば「やあこ」同然でも、多少は韓国語を操り、兄弟の中では相対的にお金の問題や人間関係に免疫のあるわたしの肩に委ねられることになった。

予想していたことではあっても、現実はその堅固さでわたしたちの生半可な思考をあざ笑う。国境を越えることの難しさが至る所で私の前に立ちはだかる。日本の役所、司法書士その他の専門家との相談、領事館に日参しての押し問答。そして韓国の法律と常識と仕事のやり方に窺われる人間関係もしくは文化の形。とりわけ、韓国

の法律と韓国に居住する韓国人の在日に対する厳しさには、気が滅入るようなことの繰り返し。

例えば、遺産相続に際して、「在日」の場合には控除は一切なく、一律五割の税率が課せられる。しかも、相続税を納入して初めて不動産の移転登記が許される。先に移転登記を許してしまえば、税金を払わないでとんずらを決め込む恐れがあるという理屈らしい。というように、本国の人々と較べて甚だしく不利な法律が明文化されているのである。尤も、在日の場合、兵役の義務などを免れているのだから、それと引き替えに金を差し出すのは当然という見方も当然あるだろう。従って、その過酷さに驚いたり憤激したりしたとしても、結局はそういうものだと現実を認めねばなるまい。

問題は実はその先、あるいはその前にある。私たちはそうした現実を知らされていないし、事情を知悉したうえで、処理をしてくれるような個人や機関がない。結果として、現実を知るにいたるまでだけでも、無駄な奔走を繰り返さねばならない。もしそうした条項の存在が周知にいたれば、在日の祖国への投資は激減するに違いないし、既に大量に祖国にお金を持ち込んだ人たちは、問題がおこる以前に予め回収の方法を模索するか、法律の改正に向けての努力をするに違いない。だのに、私のよ

うな無駄な奔走をする例が後を絶たないのは、恐ろしく無知であるからだし、その無知を助長する思考方式なり、制度の不備が厳然とあるからに違いない。在日は遺棄され、搾取され、もっと悪いことに、自らを守るために祖国に対して自立的に対応する力を欠いている、というのがわたし遅まきの実感であった。

それに加えて、個人的悔恨もある。父の懇請、命令に逆らつて、あくまで韓国の諸事に無関係を決め込み、結果的にはそのせいで事態が一層ややこしくなった面も否めないから、己の潔癖を盾にした尊大さの馬鹿さ加減、さらには父に対する忘恩という自責の念もまた眠れぬ夜の習慣となった。尤も、そうした自責があるからこそ、めげずになんとかけりをつけることができたようなものなのだが。おかげで、頻繁な電話・ファックスでのやりとりはもとより、九カ月の間に都合四回、夥しい書類その他と重い気持ちを携えて慌ただしい濟州島訪問を繰り返した。当然、その旅が快いものであるわけがなく、関係を断ち切つてしまいたいという誘惑や感傷に囚われることもあった。

ところが何にでも余得というものがあるらしく、こちらがしんどいときほど、人の助けが身にしみる。頼れる人かそうでない人かが見えてくる。一皮むけるとい

は己の目の帷のことを言っているのではなからうか。例のフランスで会った従姉妹の長兄の献身的な奔走、そして彼とわたしとの連携プレーは、在日の司法書士をして、お二人が手を握ればこの種の問題処理のエキスパートとして事業になりますよ、などとお世辞を言わせるほどで、絆は強固なものとなった。わたしは彼を通して、韓国、濟州島、そして在日のわたしを学び直した。

なにはともあれ、国を相手の緊急の問題は時限ぎりぎりに滑り込みセーフとなった。それ以外、つまりは異母弟妹や親族その他の問題は先送りだが、何だつて一気に解決などといくわけがない、一生かけるしかない、と腹を括れるようにもなった。そして、父たちが残したプラス・マイナスひっくり返して引き受けることが在日二世の責任の取り方、という考え方も次第にどつしりとわたしに心中に居座るようになった。

というわけで、時間に迫られておたおたということはなくなり、ようやく落ち着いたかと思うと、またしても法螺の虫で尻がむずがむずかくなってくる。

今年で五〇歳を迎えるのだから、その記念にと、またしても酒の席での一言が頓挫の計画を蒸し返す。当然、意気軒昂。若者に戻つてささやかな冒険をと気持ち膨らむ。断じて前回の轍を踏むわけにはいかない。怯えや

遠巡や障害には先制パンチをと、直ちに飛行機を手配した。ところがそうなると、膨らんだ風船を細かな心配の針がちくちく突く。家内外の諸事、そして、「冒険」に付随するあれこれ、例えば、交通事故、中年の体力、それと関連しての風の心配がせりあがってくる。なにしろ濟州島には三多島の別名がある。名物が女（土地が痩せて男の仕事がないから野良仕事、海女など働く女だけが目に付く）、石（火山の島）に並んで、激しく吹き付ける風なのである。

三人組は、濟州空港に降り立った。濟州島への飛行機便は観光、とりわけゴルフとセットになった夜の女性目当ての男性団体が大半を占める。この種の男どもの傍若無人は、とりわけ外国、それも韓国となると膨れ上がる。海外に出て言葉を操れない不安や殆ど国民性と思われかねない臆病さを、団体と金の力でねじ伏せようとでもいうのだろうか、いたずらに下劣な言葉で、女性に絡んだ自慢話が競われ、知ったかぶりが幅を利かせる。こちらはナシヨナリストのつもりなどなくても、やはり韓国人の末裔ということなのだろうか、いたたまれない。聞きたくないのについつい耳を澄ませては、腹立ちを抑える為の緊張と葛藤を余儀なくされる。

空港を出ると彼らとは全く別コースというわけで、よ



うやく余計な心理的苦痛から解放された安堵感、そしていざ冒険という心奮う気持ち、その反面ではかすかな不安、そうした全てを含み込んだ笑顔が浮かぶ。

しかし、一歩外に足を踏み出したとたん、風の洗礼が私達を待ち受けていた。憧れの漢拏山が見えるどころか、立木が大きく揺れ、強風に運ばれる黄砂で視界が遮られる。不安の影が一気に濃くなる。

ところが、出迎えにきてくれていた従兄弟は、こちらの不安の影をめぐりとく察知して、慰めなのか、励ましなのか、はたまた、年寄りの冷や水をからかうためなのか、ぐざりと一言。

「こんなものこちらでは普通の風、これを心配するよ
うな濟州人はいない」

いざ出発と行きたいところだけでも、中年、とりわけわたしは手が焼ける。連れの二人は飛行機で自転車を
はるばる持ち込んだ。長い待機期間に乗りこなした愛車
である。ところがこちとらは、生来の不精、自転車もす
っかり錆び付いていて、とてもじゃないけれど、わざわざ
海外にまで持ち込める代物じゃない。それにわが家か
ら関西空港までの距離を考えると、そこまで運ぶだけで
も一仕事。そういう事情に加えて、小さい頃から手形や
小切手などを見よう見まねで扱っていた小商人の小倅の
習性なのか、やたらと小金に細かいわたしは、持ち前
の浅知恵を発揮した。日韓の経済格差を利用して、現地
で上等な自転車をあつらえようという算段をしていたの
である。というわけで、なによりも先ず、自転車を仕入
れなくてはならない。大きなショッピング・モールに立
ち寄り、日本でなら買い渋ること請け合いの高級車を仕
入れてにんまり、やっと出発の準備が整った。

但し、ここにいたつても話はすんなり進まない。我ら
が大将格たる白君、何だつて緻密に計画を練る人。それ
に、自転車で脂肪肝を直したというくらいで、日頃の鍛

錬を怠らず、自転車のあれこれに習熟している。その意
見に従って、事前に話は決まっていたのだが、その通り
には進まない。今一人の大将が現れた。先にも登場願っ
た我が従兄弟である。

私達は無謀でいて警戒心旺盛。なにしろ一家の長とし
ての責任というやつもある。そこで、なによりも安全を
優先し、自動車でエスコートしてくれる人を雇おうと考
えていた。日韓の経済格差もあるのだから、三人で一人
の日当を出すのは軽いと計算したのである。しかし、そ
のつてをどこに求めるか。もちろん旅行社という手もあ
ろうが、こんな小グループの厄介を安価で手配してくれ
るような奇特な旅行社など心当たりがない。となると、
故郷の人脈に頼るしかない。しかし、この筋は下手をす
ると、命取りになりかねない。そこに頼むということは
すなわち、全ての親戚に伝わるということに他ならない。
なにしろ、濟州島はパラム（噂）の島である。そうなる
と挨拶その他でもとてじゃないけど、自由な旅行などで
きるわけがない。そこでわたしは最も信頼できる人、つ
まりは従兄弟に頼んだ。事情と希望を伝え、従兄弟は二
つ返事で手配を引き受けてくれた。というわけで従兄弟
が空港に出迎えてくれたわけだが、そこからは予想外に

話が展開することになる。

従兄弟はエスコート役は自分がすると主張し、旅程についても、すっかり案を練っていたのである。その骨子は、年齢を考えて無理するな、済州島の一番いいところだけを見て、無事に帰れ、ということだった。より具体的に言えば、車の量が多く危険な市街地は車に自転車に乗せ、郊外のそれも自転車道路が整備されている区間、及び海岸に沿った観光道路を中心にして自転車で済州島を経巡る。しかも四日間、自転車に乗り続けるなどといった無謀な考えは捨てて、間の一日は自転車を捨て置いて登山で気分を換えるのも一案、というのであった。

わたしたちは大いにうろたえる。迷惑をかけたくない、というのが第一。次いでは、それでは冒険の意味がなくなってしまう、という今回の旅行の根幹に関わる問題もあった。そこで地図を開いて、我々が二人の大将間で協議が始まった。出来る限り冒険の体裁を残しつつ、それでいて安全を確保する、となかなか微妙なジレンマを解消する案が整った。がしかし、私達は風をやはり甘く見ていた。

市街地を過ぎ、観光用の海岸道路の起点から、海岸線に沿いつつ西海岸を経て、西帰浦まで約六〇キロ、これが初日の予定だった。走行開始が午後三時、時速二〇キ

ロ計算で三時間、予定通りだと六時頃には済州島第二の都市・西帰浦に到着のはずで、その間は道筋が簡単だからとエスコートを固持して、従兄弟と分かれた。

なるほど海岸線の景色は見事で、前方からの強風と格闘して走っているからこそ、その岩と波の織りなす荒々しさの魅力の一端は、休息を知らない風によること大であることが実感される。しかしなにしろ走り初めである。景観の荒々しさの刺激もあって、おおいに張り切っている。西海岸の大きな街についての聞き知った駄洒落が飛び出す。モスルポではモサルポ（生きられない）。ところが、その口も次第に凍ってくる。

足慣らしの予定のはずが、初日の元気に任せて頑張るものだから、オーバーペース。尤も、頑張らずには進めない。それほどの風の勢いである。脚が次第に硬直してくる。旅程の半分を過ぎ、海岸道路から産業道路に入る。少し内陸に入り込むから、まともな風の影響は軽減されるはずという算段はしかし、新たな難問によって打ち碎かれる。

産業道路は経済的効率、つまり最短距離を理想とするから、屈曲が少ない分、アップダウンが激しい。それにももちろん、交通量が断然増える。

延々とした上り坂にさしかかるとペダルの重さは足か

ら腰、腰から背中、そして首筋へと伝わってくる。一方、下り坂に差し掛かると、たしかに楽は楽なのだが、新たな難問が生まれる。近くを疾走する観光バスにあおり立てられる恐怖を倍加するような、無情の警笛が全身に響く。畢竟、ひたすらブレーキに頼らざるをえず、下りの利点を著しく減殺する羽目になる。それに加えて、下り坂はやがてやってくるはずの上り坂を予想させるのだから、もうその時点で、昇りの辛さを予め体験してやるようなものである。というわけで、出口なしという気持ちになる。

まっさらな意地だけが頼りなのだが、それももう限界と思いつめる際になって、うまい具合に呉君が著しく遅れだした。殆ど日が暮れた間の中からようやく姿を現した呉君は自転車をはきづつている。生気をなくした顔つきで、「あかん」という。これ幸いに、断念することで見がまとまった。明日もあるさ、というのが口実であった。

そしてその口実で元氣を取り戻したわたしは、持ち前の吝嗇を発揮する。せっかくここに来て地の人と触れ合う機会を逃す手はない。トラックを物色して、ピックアップをと調子のいい案。ところがそうは問屋が卸さない。夕暮れの道を急ぐ車は猛スピード。手を挙げて、必死に

しつらえた頼み顔も、目に入っているはずがない。時には、邪魔だとばかり、大きな警笛を鳴らして疾走する。仕方なく、自転車をひきづり重い足を運んでいるうちに、ガソリンスタンドが目に入った。早速そこで電話を借り、従兄弟に事情を話した。そしてお迎えを待つ間、スタンドの経営者夫婦とよもやま話。ささやかながら、田舎の人情に触れた気分で落胆を紛らわせる。そうするうちに、従兄弟が現れた。私達は大いに恐縮の体なのだが、従兄弟はもっぱら慰めの言葉で対してくれた。明日があるさ、というわけである。

その夜、私達は従兄弟夫婦たちと、濟州島名物、オギヨブサル（日本で近頃、安価で美味を売り物に流行の、ブタの三枚肉の焼き肉に生ニンニクとたれを添えてちしや或いはゴマの葉っぱで巻いて食べるものをサムギョブサルと呼ぶのだが、濟州島ではより手が込んで仕立て上げたブタの五枚肉なのである）を肴にビールと焼酎で疲れを癒し、安宿で泊まった。韓国円で三万円、日本円で三千円の韓国式の一部屋で雑魚寝であるが、長年の男友達、苦になるわけがない。しかも一人当たり日本円で千円に届かない。寝酒のウイスキーなど不要なほどに早く寝入ってしまった。よほど疲れていたのだろう。

翌朝、観光がてら軽い散歩で足慣らしというわけで、

山から直接海になだれ込む滝として有名な天地淵瀑布まで歩き、安食堂で朝食には無理と思えるほどの大量の韓国式うどんをたいらげ、従兄弟とおちあつた。風は昨日にもまして激しい。そのうえ、天気予報通りに、雨がぱらついている。雨次第では途中で断念の可能性も大いにある。それで助かるという弱気も頭をもたげるが、もちろんそんなことはおくびにも出さない。悪天候に抗らつて冒険決行というのが、一応の建て前なのであつた。

予定では西帰浦から東端の城山日出峰を経て済州市方面へ、いける所までということになっているが、昨日の今日、風の辛さを忘れるわけがない。予想では追い風のはずだつた。

疲労のせいで重く感じられるペダルも、慣らし運転で筋肉も次第にほぐれ、斜めの追い風を背に受けているから、どんどん軽くなる。尤も、一旦海岸道路に入ると、海岸線は入り組んでおり、風に向かつて走ることも避けられず、そのとたんに、疲労がぶり返したりもするが、昨日の辛さの比ではない。しかも、遠方にそびえる日出峰の優雅な佇まいが私達の目を慰め、勇気づける。

白砂の海岸と見紛うようなビーチが広がる。白さが目にまぶしく、思わず足を踏み入れたくなる。しかし、そこは貝殻片でできた砂浜もどきで、裸足では入れない、

というのはわたしがこの一〇年の間に聞きかじつた知識。但し、その美しいが無用の浜が、無用な上に大きな障害になることまでは知らなかつた。近づくにつれて、真つ白な砂状の貝殻片がまるで砂嵐のように舞う。距離を置いてみれば天女の舞姿のように美しいのだろうが、そのまっただ中にいる者にすれば、到底目を開けておれない。その一方で、目をつむつて自転車漕ぐわけにもいかず、風の抵抗と恐怖とで、時速五キロにもならない苦闘が一〇分ほど続き、肉体に加えて精神的な疲労が積み重なる。貝粒の嵐を脱した。苦難を脱した直後のせい、日出峰がひととき大きく見える。もう近い。誘われるままに気が急いで、速度を上げないわけにはい。

日出峰、そこは島の最東端にあつて、島から突出した岬にそびえる峰。日の出を拝む名所として有名だし、そのそびえ立つ独特の風貌が観光客をひきつける。峰を迂回して海岸線をたどると、荒涼とした地の果ての風貌。遮るものはなにもなく、恐ろしいほどの風が体を遠くへ運んでいきそうな気配。冒険の醍醐味というわけである。しかも、ここまで来れば、半日の行程は済んだ。そう思うと抑えていた空腹感には抵抗できない。日出峰への登頂はお預けにして、その先の海女さんたちが共同で営み、アワビのお粥で有名な食堂へと向かつた。



お粥が給仕されるのを待つ間に、空腹凌ぎにとサザエを取った。そしてサザエと来れば、私達がアルコールなしで済ますわけがない。頑張ったご褒美という口実もある。午後の行程もあるからほんの一口だけを盾にビールで乾杯。

因みにそのサザエ、貝殻は日本のものと変わらないのに、中味がおそろしく充実して大きい。三、四個食べるに、ビールのせいもあってかお腹はばんばん。なのに、ようやくやってきたお粥のえもいわれぬ味についつい満腹を忘れて平らげた。もう動くのはいやという感じ。しかし、そうもいかない。

再出発してほどなく、わたしの膝はうめき声をあげはじめている。岬を越えて方向が反対向きになったわけだから、当然、風は完全に向かい風になっている。追い風であれば、だましましでしのげる古傷も、真つ向から吹き付ける風との格闘には荷が勝ちすぎる。熱を帯び、炎症がどんどん広がっていく感じがする。それに昼食の休憩が、昨日と午前の疲労をかえって募らせたかのようで、力が戻ってこない。海岸に打ち寄せる白波の舞は、絵はがきのように現実感を消し去った美しさを誇示しているが、その波の破片が突堤を越えて道にまで届き、風がこれみよがしに猛威を奮う。自転車を止めてしまいた

い誘惑との格闘が続く。なんでこんな苦行を、と思うが、もちろん誰を恨むわけにもいかない。誰かが音を上げれば助かるのになどと、二匹目のドジョウを狙うばかりか、仲間に責任を預ける心根が浅ましい。前方を見るところか、ハンドルをとられないようにするだけで精一杯。ふと前方に目をやると、遙か彼方で従兄弟の車が停止し、何か叫んでいるが距離と風がその声をかき消す。

自転車を止めて全員集合。タバコを一服の我々三人の前に、今日はこれまでにしておけ、と真顔の提案。願ったり叶ったりなのだが、正直には告白できない。負けるわけにはいかない、が一応の意地。三人が言葉少なく、目で相談する。ためらったあげく、ついには従兄弟の顔つき口調に気圧された格好で受け入れることで話は決着した。但し、別のコースで再挑戦などと、さすが中年の粘り腰、一筋縄ではいかない。従兄弟も呆れ顔で妥協する。上り坂が少なく、順風のコースを考えついたという。こうして、ひとまずは安穩な車の人となった。

車中から眺める景色は、まるで台風下のように。よくもこんな状況下でサイクリングをしていたものなどどとまるで他人事のように。そして先ほどまでの苦しみの反動もあって、風と波と島の風景の重なるの美しさが絶品に感じられる。先だって仕事で訪れたハワイと較べても遜色

ないどころか、一段上の感じがしたのは、故郷鼻根のなせる業だろうか。

苦難を逃れてやれやれなのだが、その一方で挫折という思いは否めない。こういう時には、冗談が一番というわけで、お得意の告白が始まる。ぼくの膝が涙を流しながら兄さんと呼んでいたのですよ。ぼくの膝の声を兄さんが聞き届けてくれたのでしよう。ぼくの膝と兄さんは恋仲なのかも。

従兄弟は間を置かず大爆笑してくれた。

さて、海から目を転じて、北済州の山側の光景は、折りからの強風のせいもあるのだろうが、荒涼の一語につきる。まともな木が見えない。地をはいつくばる植物が見えるだけで、風に押さえつけられながら、必死に耐えている風情。この風のせいで、このあたりにはまともな農産物が育たない。厳しく鍛えられて、人情も至って厳しいものがある、というのが一時もガイドの任を忘れない従兄弟の弁。それを受けて、これまでにその種の話をよく聞かされたが、今回はすっかり合点がきました、と呉君は溜息をつく。実は彼のご両親、故郷がまさしくそのあたりなのであった。

山腹についた。海岸ばかりでは済州島の全ては分からない。山間の道も経験し、豊かな自然を満喫してもらい

たいという従兄弟の心遣い。車は少なく、昇りもなく、加えて追い風という願ったり叶ったりの保証を受けて、私達は勇んで降り立ち、自転車セッティングにかかる。従兄弟は私達の懇請を受けて仕方なくそこまで案内はしたものの、風で根もろともなぎ倒されそうな木立を指さして、本当にこの風の中で敢行するのか、と呆れきった様子。ところが、あの向かい風を脱して下りの連続とあらば恐いものなしのわたしたち、にこにこ笑って、んで取り合わない。しかしこの種の脳天気、必ずしつべ返しをくらう。

再出発に先立ち、我が大将白君が改まって二人に注意を授けた。これだけの下り坂だから敢えて一言。スピードがついてからの前輪の急ブレーキは厳禁。まずは後輪のブレーキでスピード調節して、その上で前輪のブレーキを作動させる。でない、と、転倒の可能性が大で、これほどの坂で、しかも道路脇が谷という条件では命に関わりかねない。

それで怖じ気が出たわけでもないのだが、もっぱら下りだけの走行もまた並大抵ではないことを思い知ることになった。なるほど、漕がなくとも勝手に自転車は進む。快調だといったけれど、どんどん加速し、自転車はこちらの支配下を離れて一人走り始める。それに山道で

ある。急カーブもあれば、谷からの恐ろしい風もある。道の両端には細かい砂がたまっていて、下手をするとスリップしかねないのに、そのうえ突風と来れば、もう一たまりもない。そこでひたすらブレーキに頼ることになる。こう言えば、ただ怖じ気をふるったというだけの話なのだが、実はそうは簡単ではない。

大将の注意に従って前輪のブレーキを引くのを避けたのだが、恐くなるといついつい利き腕に頼りがちで、その利き腕の側、つまり右手が前輪のブレーキになっている。もちろん、素直に左手を利かせればよい。しかし、利き腕に頼ってはいけないという禁止は、体、次いで精神を緊張させ、あげくは混乱に追い込む。恐怖と禁止命令の狭間で、冷や汗を流しながら、十分な練習を積んでくるべきだったという後悔の念が、ますます体を硬直させる。しかも、そうした心理的な罠にはまると、目と手がおろそかになって、ハンドルをとられてヒヤリというわけで、快適どころか恐怖の走行を一時間も続けると汗がだくだく、それも冷や汗が脇の下から全身を経巡るという次第であった。

ようやく、急滑降が終わった。楽な走行だったと笑みを浮かべている連れの二人を横目に、それと引き較べて己の臆病はなんたることか、運動神経にも自信はあった

のに、と人並み以上の老化を確認せざるを得なくなる。とは言うものの、あとはひたすら平坦で、二〇キロほど行けば民俗村に到着という。そこにはあの伝統的な韓国風お好み焼き、それに濁り酒が待っているという励ましを受けて、気を取り直して、再出発となった。

しかし、どこまでも苦行が待ち受けている。なるほど周囲は山腹とは思えないほどに平坦な平原が広がっている。その雄大な見晴らしに、従兄弟がここを選んだことに得心がいく。

当然、道も平坦である。少なくともそう見える。ところが、ペダルがいやに重い。それに、変化が少ない地形のせいもあってか、いくら漕いでも前に進んだ気がしない。蓄積した疲労のせいなのだろう、ともかく頑張るしかない、と言いつけても、前には進まない。歩いた方が早いのではと思えるほどになる。

しかも、またしても風がわたしたちを襲う。今度は横風である。まともに食らうとハンドルを取られて転倒したり、道の真ん中に振られてしまいそうである。いくら車が少ないと言っても、そうだからかえって、時折通う車は恐ろしいスピードで疾走するから、断じてハンドルを取られるわけにはいかない。そこで、右側からの風に対抗して、こちらは自転車の向きを右四五度の方向、上

体をぎりぎりまで前傾して、やつと直進できるという案配。

しかもその風、平均して襲ってくるわけではない。道の両側には防風林があつて、それに守られているうちは風の勢いは弱まり、その林が切れると、突風が襲う。泥を含んだ砂塵を痛いほどに吹き付ける。その度に、目をつむりつつ自転車の向きを調整しなければならぬ。すっかり風に弄ばれているわけである。

あまりの緩慢な速度に業を煮やしたのか、前方で従兄弟と大将がストップして遙か後続の私と呉君を待ち受けている。青色吐息で追いついた私達に、従兄弟が言う。ここは平坦と思っていたが、いざお前たちの苦しみ方を目の当たりにし、改めてよく見ると、かすかな昇り道であることが分かった。濟州島のことなら何でも分かったつもりでいたが、何でも実際にやってみないと分からないものだ。それに、傍観者から見れば平坦なようで、当事者にはかすかな昇り道、その果てのない道行き、それこそまさに人生だ、などと感慨を覚えた。学ばしてもらったよ。

従兄弟の感慨はともかく、わたしにとつては、昇り道であつたこと、それが肝心。そうなるこの辛さも合点がいく。合点がいくと少しは元氣も出る。そこで従兄弟

の感慨に冗談でおつき合いする元氣も出る。冗談の軽さで疲れを吹き飛ばそうという魂胆。

いいえ、兄さん、多くの人生は平穩に見えても、精神的には急降下、急上昇の連続ですよ。

冗談と爆笑で氣を取り直したつもりになっても、疲れを追い払うわけにはいかないし、距離が短くなるわけでもない。ましてや風が収まってくれるわけもない。ひたすら、距離表示を追い求めて自らを叱咤する。あと五キロ、なのにその五キロがいかにほどに遠いものか。集落が前方に見えたときには殆ど力が尽きていた。

砂埃と紙屑が舞い、商店の看板まで吹き飛ばされそうな勢い。民俗村の見学もそこに、店に入った。お好み焼き、それに濁り酒がお目当てなのだが、風のせいで店内のあらゆるものがざらついている。そのざらつきのせいもある、とうてい食欲などおこりそうもない。しかし、この店の濁り酒、そんじょそこらではありつけない。粟でつくった伝統的な濁り酒といわれれば、試さないわけにはいかないのが酒飲み性の性。なるほど、その風味はなかなかで、ついつい飲み過ぎてしまいうそう。その場にへたりこむ懸念もあって、ほどほどにして車上の人となった。

これで一日の旅は終わりというわけで、わたしたち

への氣遣いから解き放たれた従兄弟の口は滑らか。濁り酒の助けもあって疲労に身を任せていた気分も我々も、適当にあしらうわけにもいかない。相づちを打つうちに、ついつい話にのめり込む。濟州島の風土と歴史、そこに生きる人間の考え方、そして己の生活信条などが次々と話題に上り、感想と意見が求められる。私達は拙い韓国語ながら、思考方式の違いを越えて、同世代人としての共通点を探り出しては、大いに感銘を受けるが疲れには勝てない。次第に口数が少なくなった頃には、もう西帰浦の明かりが見えていた。

今日からは「まとも」な宿に移動する。濟州島觀光にやってくる、昨夜のしがないホテルが標準などと思われたら心外という、従兄弟の地元鼯鼠のなせる業である。大韓航空直営のなるほど立派なホテルで、わたしが濟州島でまともにホテルと呼びうるところに泊まるのは、あしかけ一〇年でこれが初めてのことである。

夕食は特に私が所望して、太刀魚のスープ。何の変哲もない魚のスープである。太刀魚、カボチャ、そして青唐辛子、ニンニクのスライス、それ以外になにも入っていないのに、これが絶品で、活きのいい産物には塩少々だけで後はなにもいらぬものなのだが、その典型と云っている。数年前にこれを初めて食したときには、こん

なおいいいものが韓国にあるものかと驚嘆し、その後で訪れたプサンでも、活きのいい魚を食べさせると評判のチャガルチ市場に行つて、同様のレシピーを特別に注文してみたが、同じようにはいかなかった。何かが足りなく何かが余分。というわけで、私の数少ない故郷自慢のひとつとなつたものだった。濟州島の太刀魚スープこそ絶品、他では食べられない。

三日目の朝。初日の出発点から逆向きにスタートして、濟州市を通り抜け、昨日頓挫した地点に向かう。但し、昨日の今日である。その中途くらいが限度と一応の目標を立てた。約六〇キロで、普通の条件であれば、軽すぎくらいである。

二日間の疲労がたまつて初めは思うように足が動かないが、風を背に受けているだけに快調で、とりわけ海岸道路の湾曲と適度のアップダウンの繰り返しが征服感を与えてくれる。いつかこの島に別荘のようなものをといた冗談が蘇り、適当なところを物色するような目の動きも始まる。風光明媚、周囲の人々との一定の距離、それでいながら交通の便などと欲張つた条件、それにぴつたりの瀟洒な建物が時折見える。あの程度なら、後は風避けのしつかりした木でも植えればなどと夢のような話

が現実味を帯びてきたりもする。しかし好事魔多しの伝で、その快調さに勇氣を得て、途中から、最短距離の産業道路を避けてもつと趣のあるコースをと欲張つたのが悪かつた。飛行場におつかる。広大な飛行場に沿つた小道を行けども行けども、幹線道路にはたどりつかない。随所に武装兵士の姿が見える。ふと不安になり、だからこそ不審に思われぬようになどと余計な心配をして声を掛けてみる。従兄弟と落ち合う予定の名所、龍頭岩にこの道で行けますか。武装兵は近寄つてみると、ほんの若者。返答はすこぶる優しく、はにかんだ童顔が覗く。この狭い道をそのまま行けば、飛行場を過ぎて、大きな道に出る。そこから龍頭岩へは分かりやすいとのこと。その言葉に勇氣を得て、そのまま直進し、随分遅れはしたものの、無事に従兄弟と再会。

裕福な若者たちに人氣のデイトスポットという瀟洒なレストランで昼食を済ませて、またもや出発。但し、市街地は交通量が多いから、その間は車の人となり、市はずれでまたしても走行開始となつた。従兄弟と落ち合うのは鍾乳洞で有名な洞窟の入り口。昨日走行を断念した地点から三〇キロ手前のところである。

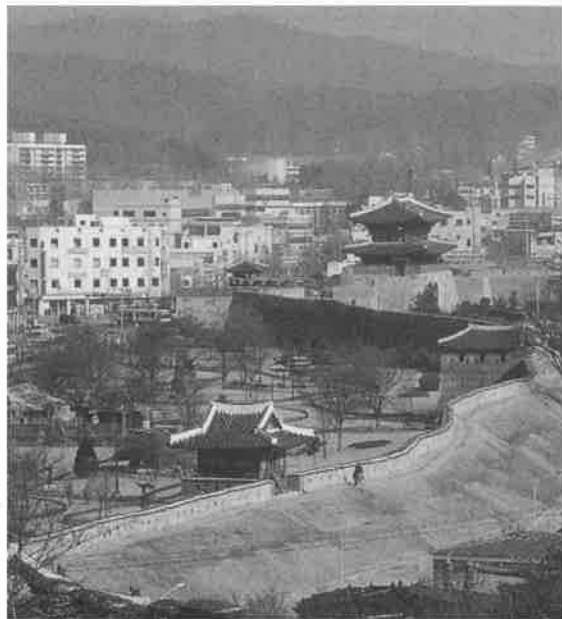
午前中にもまして快調、なにより道路がすこぶるよい。どうしてこんな道路が必要なのかと訝しく思えるほどに

立派な道路に、車はたまに行き交う程度。さらに贅沢なことに、幅広い自転車道までが付設され、その自転車道を利用するのはわたしたちだけなのである。因みに言い添えれば、この冒険のあいだ、サイクリングをしている姿には全くお目にかからなかった。

そのうえ、午前にまして完全な追い風で、風を受けての走行はまるで飛んでいるかのよう。予定より一時間近く早く従兄弟の車をみつけた。従兄弟はこの間のエスコートで疲れはてたのか、車内で眠り込んでいて声をかけるのはばかれる。

従兄弟の寝顔と較べて、自分たちの余力を感じる。そうなると昨日の頓挫が許せなくなる。あそこまで行こうか、との声が拳がる。一瞬の逡巡の末に意見が一致。車のフロントガラスにメモを残して、走り出した。相変わらず、車の影は殆どない。ひたすらスピードをあげる。見晴らしが利き、道がいいから、スピードを試すには絶好のコースである。自信も蘇る。

途中から海岸道路に入る。海岸線の景観、とりわけ白い波、青い海は目を楽しませ、心身を大いに励ましてくれる。呉君は初日のダウンを取り返すように先頭を疾走している。後塵を拝した二人は、あいつ凄い元気やないか、などとにんまりしながら、その元気のお裾分けをも



らったように弾みがつく。

もうとつくに追いついていいはずの従兄弟が現れない。心配になり、連絡を取ろうと電話を探していると、ようやく従兄弟の車が追いかけてきた。

眠りから醒めたらメモがある。急いで追いかけたものの、見当をつけた地点で見つからないものだから、何か事故でもなどと心配していたという。大いに安堵のつい

でに、ぼくらの意気盛んな様子に呆れている。お前たちは本当に普通じゃない、という言葉をお褒めと取って、元氣百倍の私達のペダル運びにますます弾みがつく。一氣にあの挫折の地点にたどりついた。張り切った分だけ、足の筋肉は硬直している。しかしここまで来れば、あのアワビの店までいこうじゃないか、とまたもや野心が膨れ上がる。敗北を取り返すだけでなく、征服になるんじゃないか、というわけで、欲張りは果てしない。

しかし、張った欲はすぐさま罰を食らう。そこからの海岸線の激しい屈曲のせいもあって、追い風は稀になり、まともに向かい風を食らう羽目になる。話が違うじゃないかというのは私の内心のうめき声にすぎず、硬直した足はもう限界である。しかし、風のうなりを、征服・征服の号令のリフレインと見なして、挑みあおり立てる風に最後の力を振り絞って対抗する。

無事到着となった。自転車を止める。しびれて、すっかり自分のものではなくなった足は宙を舞っている。相寄った三人の顔はすっかりほころんでいる。やったぜ、という声と共にハイタッチ。子供のような喜びようが恥ずかしく、その照れがまた、一体感を生み出す。

西帰浦まで、車で一時間近く、左には暮れなずむ海に漁火が明滅する。右手には漢拏山が、見る場所、角度に

よってその優雅な風貌に趣のバラエティーを添える。静かに我々を抱き抱えてくれるようなその雄大さに見とれながら、疲労がじわじわ全身に快くしみとおっていき。もう言葉はいらない。疲労に全身を預けていた。

韓国料理ばかり続いたから日本料理が恋しかろうとの配慮で、夕食は寿司と刺身の専門店に招待を受けた。しかしこれまでの経験から、韓国の握り鮭と刺身は頂けない。日本のそれとは似て非なるものである。ワサビが悪いこともある。けばけばしい原色のそれは、着色料のペーストといったほうがふさわしく、ワサビの風味などとはほど遠い。それにもちろん、素材自体の問題もある。濟州島には新鮮な魚が数多いはずなのに、刺身で出てくる肴の多くは養殖で、その養殖の方式（例えば、餌）も日本ほど洗練に至っていないといった事情もあるに違いない。因みに、天然物の水イカなどは、そのとろけるような甘さが絶品だし、それに、今回は季節外れでお目にかかれなかったが、濟州島独特の小鯛の刺身汁は骨もろとも食べるのだが、そのこりこりした食感、そして汁に大量に含まれた酢がもたらす清涼感もあってなかなかのものなのだから、簡素に見える料理ほど付け焼き刃は利かないということなのであろう。しかしそれ以上に、韓国と日本の料理文化のみならず、文化一般の差異が、と

りわけこうした単純そうに見える料理においてこそ顕著に現れるということもありそうな気がする。例えば、給仕の仕方における日韓の大きな違い。とりわけ、量である。ほどほどの量を丁寧な、ということがないのである。とりわけ接待のような場合、いくら頑張つて食べても残るくらいでない、ホストに恥をかかせたということになるらしい。日本のそれも都会で育ち、豊かさ故のソフイステイケートされた食文化に慣れてしまった我々は、その量だけでも圧倒され、食欲がそがれる。味わうという余裕もない。

しかしこうしたことをすぐさま国民論に一般化するとは慎まねばなるまい。日本料理の物まねとあらば、こちらは日本の粋を気取つた物言いをしてしまう。さらには、ここぞとばかり、韓国の後進性を言い募りがちである。あなた方はすっかり先進国の仲間入りをしたつもりだろうが、まだまだ日本には追いつけてはいないのですよ、といった具合。誇り高い韓国人に辟易することが多いから、その腹いせとばかりに、内心で冷や水をかけて一本取つたつもりになるのである。

それに、私達が往々にして文化的差異などと大層に取り上げることどもは、時代の進展につれてその多くが消え去りそうな気がする。大きな差異にみえることの多く

は、日韓の経済格差、とりわけ、その発展のタイムラグに起因している。そうしたタイムラグはどんどん縮小する雲行きで、とりわけ、若者たちを見れば、食文化の世界同時代性という現実を否定することは難しい。

因みに、のり巻きについて一言。のり巻きは今や韓国の流行でどこでも食べられるし、特に若者に好評で、ナウいらしい。そして、なるほどおいしいのだが、日本のものとは異なる。あのびびんば（韓国式五目ご飯）を海苔で巻いたと考えれば近い。いつから出回り始めたのか、日本にもサラダ巻きというのがあるが、その韓国バージョンとも言えよ。ということはこのり巻きのよくないわばファーストフードにおいては、諸文化混淆のまさしく世界同時代の傾向が如実に現れており、韓国風のり巻きが日本に逆輸入されるのも遠いことではない、との予測も可能なのである。

ところで、その夕食の席で、嬉しい再会を果たすことができた。西帰浦で新聞社を営んでいる社長夫婦。この人、歯科医をするかたわら、私財をなげうって週刊新聞を発行しておられる。私の従兄弟も、その趣旨に賛同し、寄稿したり、子供向けの教育プログラムとして、日本のアニメを上映したりする催しに積極的に協力している。そういう縁もあって、私とは顔見知りで、一昨年に

訪日された際に大阪で杯を傾けて以来の再会である。その人が私達を大いに喜ばせる言葉を向けてくれた。

私達の冒険は衝撃だ、と彼は言うのである。彼も若い頃に濟州島一周の自転車旅行をした。それが若者の文化のひとつである。しかし、四〇も五〇にもなつてこういうこと企てる人はいない。外見が重要で、裕福を銜う、地位を銜うことが、当然のこと、かくあるべきものとされている。例えば、大きくて高価な車にふんぞりかえつている姿が、尊敬を集めるのである。その逆に、汗を流して働くことは、蔑視の対象となる。自転車を乗り回す大人なんて考えられない精神風土がある。しかも、在日の人たちが濟州島に来れば、ゴルフと女漁りくらいが関の山なのに、あなたたちは濟州島を真に体験されにいられた。濟州島人としてこれくらい嬉しく、励まされることはない。しかも、この季節、一年の中でも最も風がきつくて、お年寄りには外に出ないようにと毎日の気象情報で告知されるほど、それもここ数日は近年お目にかかったことがないほどの厳しい風なのに、よくもまあ、走り続けられた、私達もその精神に学びたい、と賛嘆の表情で言われたのである。

そういう賛辞をお世辞と聞き流すほど賢明な私達ではない。有頂天になつて大いに飲まずにおれない。あげく



は、高級ホテルのカラオケで歌を歌い、踊ったのであった。私のような不調法者が韓国風の踊りをするのを見て、従兄弟たち、大いに笑い、喜んでくれたのだが、飲んで踊るのはその間だけでも酒量が減るし、汗を流すついでにアルコール分解を促進するはず、という理屈に基づくわたしなりの「科学的」健康法なのであって、接待へのお礼というわけでは必ずしもなかったのである。

最終日はそれまでと打って変わって見事な晴天で、天が私達の苦勞を労い、祝福してくれていると、こじつけでも思わないわけにはいかない。やり残した区間、つまり初日に頓挫したガソリンスタンドから西帰浦までの行程に再挑戦。それが果たされれば、征服はそれなりに形を成すことになる。ガソリンスタンドまで車で運んでもらい、お世話になった経営者夫婦に挨拶をすると、奥さんは大いに感激し、同年代の私達の壮挙を励ましてくれた。

さあ、最後の出発。漢摩山を左手に仰ぎ、右には真っ青な大洋を望んでの軽快な走行。行き交う車の若者、なにを言っているのか判別できないが、手を挙げて微笑む表情から、頑張つて、とでも励ましてくれているのである。大いに気をよくして、絶好のコンディションでの

ツーリングを楽しむ。但し、私のお得意の心配性はここでも顔をのぞかせる。最後で気を緩めるとろくなことがないなどと小心を発揮して、下り坂ではこれまで以上にブレーキのお世話になって、先行する二人を心配させたのだった。最後の厳しい坂を越えると、懐かしい西帰浦の街が見えた。

無事に西帰浦に到着したのが、丁度一二時。白君の自転車に備えつけのメーターによると、延べ走行距離は一九九・四キロメートルとのこと。当初の予定では約二〇〇キロの数字があがっていたので、ほぼ計画通りというわけで、風の妨害を計算に繰り込めば一・五倍くらいには値すると内輪誉めの一席を繰り広げたのである。しかし、人間、現金なものである。達成と思うとますます元気が出てくる。数字が中途半端で、征服というには座りが悪い、との声があがった。そこで、混雑する町中で不足分六〇〇メートルを走り、帳尻を合わしたのである。

最後の食事は、従兄弟の奥さんの妹が、振る舞ってくれるという。年寄りの冷や水に興味をそそられ、その蛮勇に拍手の意味だとのことで、断るわけにはいかない。名物の海鮮鍋、トウツベギ（辛い海産寄せ鍋と考えればよい）で汗を流しながら、おきまりのビールで征服を祝う。三人組の中でもとりわけビール大好き人間の我が大

将白君にこのとき、ニックネームが献呈された。名前べく・チュサンの語呂合わせで、メクチュサン、漢字にするると麦酒山となる。彼は大きに照れながら、その命名を濟州島記念に拝受すると宣言して、またしてもビールで乾杯を繰り返したのだった。

帰り支度の手始めに、自転車解体・梱包に着手するところが、ここでも私はお荷物となる。連れの二人は手慣れたもので瞬く間に完成したのだが、私だけがおいてけぼり。梱包用のサックがない。それよりなにより、ボルトの締め具合が異常に固くて、機械音痴なうえに非力な私の手に余る。そこで全員総掛かりで、解体なかばの自転車を段ボールで何重にも巻いて、不細工でもなんとか飛行機で運べる程度の梱包に至ったときには、もう出発の時間にぎりぎり。急いで従兄弟の車に乗り込み、慌ただし別れの挨拶。空港でチェックインしてようやく一息というわけで、またしてもビール。ほろ酔い気分で濟州島を後にした。

喉元過ぎれば熱さ忘れる。こんなに愉しい旅は初めて、というのが私達の一致した感想であった。連れの二人とも濟州島は初めてではなかったが、濟州島がこんなに美しく、料理のおいしいところだとは初めて知ったという。

それはまた私の思いでもあった。そこで再挑戦の話が持ち上がる。征服とはいふものの、今回はまだ不十分、従兄弟の力を多分に借りたといふこともあるし、市街地は回避したわけだから、本当の所は濟州島一周とはいえない。次回はリュックを担いで、真の征服をというのが目標となった。しかし、いつになったら実現することやら。ところで、後日談。

父の形見に小さな家でも買って、そこを根城に濟州島訪問という話が母の口からもれた。心配性の母がそうした夢のようなことを口にするのは珍しい。ついつい私も警戒心を解いた。いい話やないか、濟州島で老後を過ごしてもいいかなあと思っている、と口を滑らしたのである。ところがそのとたんに、母の表情が一変した。馬鹿なことはいわんとき、あんたがあそこで暮らせるわけがない、とにべもない。

しかも、その一月後には、さらに追い打ちがかかる。一人暮らしの母を久しぶりに訪れると、顔色が暗く、おまけにこちらを見る目に険がある。問いたですと、嫌な夢を見た、といって、まるで敵を見るような目つきである。私が濟州島に住むといつてきかない。亡くなった父までもが、あっちへ行くと言う。いくら反対しても二人とも耳を貸さず、もう寂しくて、苦しくて、と胸の痛み

を訴えるように言う。

「あちらで生まれ育った自分でも、あそこは恐いと思うこともある。ましてや、日本で生まれ育ったお前がその歳になって、子供じみたことを。何かの悪い前触れではないか、などと溜息をつく。」

返す言葉がないままに、脳天気を見すかさず、冷や水をかけられた、という思いが後を引いた。当座の難事を解決した、そのうえ濟州島征服を果たした、などといった気になっていたことは否定しがたい。それだけではない。ここ数年、生き難さという感触が募ってきている。あれほど悩んだ民族差別や、それに起因することが多いはずの私の内部の硬直やねじれを、やっとこの歳になってあるがままに受け入れることが出来そうな気になっており、この社会の差別も相当に改善されるようになったのに、それと反比例するように「日本疲れ」とでも呼ぶしかないような不愉快さ、心理的不適応症候群が目立ちはじめってきているのである。もちろん、そこには、年齢的な要素もあるに違いない。現に、安定した職を持たないから、老後の不安も恐ろしく現実味を帯び始めている。というわけで、数年後にはこの社会から遁走し、あちらで老後を、という思いつきが折りに触れ、顔を覗かせるのである。

そうした現実逃避の甘ちゃんぶりを彼女は直感的に感じとっていたのかもしれない。老けるのはまだ早い、大人の責任もある、与えられた場で力を尽くせ、といった叱咤、或いはまた、この社会であれどの社会であれ、そこで声もなく死んでいった仲間たちのことを忘れてはならない、といった訓令、さらにはまた、私達は実に多くの人に生かされてきた、しっかりと生きて恩返しをしなさい、といった論しとさへ解釈できそうなのである。少なくとも、この現実から逃げるな、といったところであることは間違いない。

海峡を股に掛け、様々なものと格闘してきた生涯、その強さには勝てないなあ、という折に触れ顔を覗かせる敗北感がいつにもまして私を圧倒する。しかしその一方で、この歳になってまで親に負けてはおれない、勝つてやる、と反動が押し寄せる。但し、母がいなくなつてから、などとあくまで姑息なことを考えているし、彼女に勝つということが何を意味しているのかも定かではない。こういうわたしは、やはり「二世の甘ちゃん」を脱しきれない、ということなのだろうか。勝ち方をゆつくり考える為にも、時折は小さな冒険を己へのプレゼントにするくらいのは許してもらふことにするか。

連
載

日本中国ことばの来往ゆきりまひ

二十世紀の残したものの

その62

芝田 稔

はじめに

二十世紀を締め括る日が近づいて来る。いまこの時点に立たされてみると、八十余年の歲月も須臾の間に消え去ったことに驚く。そして回顧と反省を通じて柄にもなく感慨に耽る一時を得た。本誌では一九八〇年六月号から「日本中国 ことばの来往」などと、途轍もないテーマの下に、中国語を軸にして中国と私との関わりや中国人の生活文化の諸相を思い付き次第に好きなことを書いてきた私にとっては、矢張り同じ時点に立つ中国知識人、とりわけ文人たちの心情やその動向について関心を持た

ざるを得ないのである。

戦後、近くて遠い国となった中国を曾て二十年振りに訪問した。解放戦争という激動の歴史を歩んだ古都北京の学生たちに接して喫驚したものだ。帰国して一週間も経たないうちに文化大革命が発動されて中国は再び闇の彼方へ。そして十年が過ぎた。それから二十四年後の今は世界中が「経済・経済」に明け暮れている。「昔物語り」に終るかも知れないが、あの「文革十年」を現在に絞って中国ではどのように見直されているのか、考察してみることにした。



文革と紅衛兵

中国では曾て文化大革命の十年間を、歴史上の「十年浩劫（十年の大災難）」と政治的に決定を下したことは内外周知の事実である。またその当初に逸早く中国文壇の長老である巴金が先頭に立って「文革紀念館」の建立を提唱し、大きな反響を呼んだことをも記憶している。あれからでも已に十数年の月日が流れているが、現在はどうのような状態なのか。張石山『未来世紀考古索引』により、「一斑を見て全豹を卜する」を試みをしようと考えたのである。

中国では「文革」を「浩劫ハオジェ」と決定した以上、この「大災難」の原因は「自然現象」に起因するものではなく主として「人為」によるものであることを認めたのである。だからこそ文革の主役に回った「四人組」が正式裁判で処罰を受けたのは当然であった。だが、文革十年間に全国的な規模で繰り返し行われた紅衛兵たちの国家に与えた物心両面の実害に対してどのような処置が取られたのかは知る由もない。

従って「文革」と真正面から取り組み、その正体を発見し、研究し、著述して後世への教訓を残しておくことと考えている文人たちも、現時点では手出しの出来ない、いや出しても効果のない無駄骨に終ることを心得ているかに見受けられる。張石山の標題が示すように、中国の「文革」が将来何世紀か後に、地下から発掘されて、考古学の対象となり、理性的に追求され、正義の審判が下される日待つかない、これが今提供できるその索引だというわけである。

文革が終焉した七六年には知識人たちの文革に対する反駁反省が熱気を帯びたことは当然のことであった。だが間もなくその後を追っかけてきたのが「前方を見よう」という呼びかけであった。「昨日より今日、今日よりも明日を！」と叫ぶ声が次第に大きくなり、広がって行き、

また文革中に痛めつけられた知識人でさえも心の傷口が癒え、^{いた}勞わりの言葉でもかけられると、遂に「過去のことは水に流そう」といった上げ潮に押し流され、一時は文革に対する回顧反省を叫び、肅清・清算の聲が此処彼処に起こったけれども、その声は天にとどかず、等閑視しているうちに曾ての紅衛兵たちも、もう中堅どころの壮年期に達していたのである。

文革中は一切の「授業を放棄して革命ごっこにかけ回る」「殴打、破壊、略奪」を恣いままにした紅衛兵たちの日々は、それが彼らにとつては輝かしい生涯の一駒であつたにちがいない。彼らは「毛沢東語録」を振りかざし紅軍の「長征」遺跡や延安を偲び、赤旗の下、青春を熱烈に謳歌していたのである。

文革が始まってからの十年、終つてから更に二十四年過ぎた現在では、物理的時間はまだそれほど長く経つてはいないのに、人びとは奇跡ともいえるほど「集団失語症」を患っている、と見做されている。言葉を変えて言えば人びとの共通認識に由るものか或はその実誰にも計り知れない原因によつてなのか分らないが、文革と真正面に取り組み、文革を念入りに観察することは、現在の学者研究には立ち入り禁止区域となつてゐることである。

とはいえ、新聞雑誌上では時たま文革に関係した本人

や被害者、目撃者たちの文革に対する文章が見えるし、また民間では心安いもの同士三人集まれば、話の序でに「田畑の中で御上をそしる」ことも全然無くなつたといえないようである。

曾て「農民作家」と讃えられた趙樹理^⑤は中国農村における解放政策と取り組み、問題小説を次々と發表した。土地改革を中心に据えて、村の構造改革から結婚制度、迷信宗教の打破等、農民の生活・意識の変化に光を当てて大いに活躍し、名声を揚げた作家である。だが結果から見れば彼の雄叫びも「鞭が長クトモ及ブナシ」の例え通り、しかも小説そのものの本質まで台なしにしてしまつた。また呉晗は有名な京劇の脚本「海瑞罷官」を書いて彭德懷將軍の罷免を当て擦つたけれども矢張り「靴ヲ隔テテカユイトコロカク」の感は免れなかつた。この人たちは不幸にも文革中にその肉体まで消されてしまつた。このように「思想の先達」と認められていたような人たちがさえ、その生命を絶たれ、後になつてやつと届いた只一枚の名譽回復文書で贖われる始末であつた。

昨年の春、紅衛兵のことについて、ある老作家が自分が体験した記憶を「思痛録」の中で少し触れたことがあつたそうだ。思えば紅衛兵が誕生してから已に三十三年の歳月が経つている。「紅衛兵」はも早や「聖域」ではな

い、というのが時勢の風潮であった頃である。ところが、この話題が大きな論争を引き起こしたのであった。

論争の一方側：文革の発動とその原因については未だ追求せず、文革の「創案者」に対して審査もせず、また紅衛兵の胎動・形成・誕生・大量生産の経緯を分析していない、そんな役所の口振りを受け売りして紅衛兵を政治的に規定するのは不公平である。作家が「紅衛兵はどうして反省しないのか？」などと詰問するのは情理にもとるものだ。

他の一方は、誰だつて過ちはある。ところで紅衛兵に過ちがあつたのか。なかつたのか？ もしも紅衛兵に過ちがあつたとすれば、当然その過ちを認めて回顧反省すべきである。

この論争は当初激しく燃え上がったが、勝負のつかないうちに立ち消えになってしまった。「紅衛兵に過ちがあればそれを認めよ」と言つても、誰一人として申し出るものがないなかつたし、「紅衛兵を話題にする前に先ず文革を発動した元凶を追求すべきだ」と言つても、未だに追求することさえできない状態が続いている、というのが実状のようである。

史上前例のない文革は、遂に史上前例のない失敗をしでかした。紅衛兵の小勇將たちも、これまた史上前例を

見ない扱いを受けた。曾て中国では度重なる政治運動で先頭に立った人たちのように功を立てて表彰されることは一度もなかつたからだ。これは紛れもなく同一世代の青年にとつては幸運であり、民族の幸運でもあつた、という他はないようだ。



老舎の死因

山西省生れで中国解放の先鞭となり、農民への土地解放をテーマとして、中国農村の構造の変化、農民の生活、慣習の変化及び生産意欲の変化等々、多くの作品をものして「農民作家」と称された趙樹理については、同じ山西省出身で元紅衛兵の一員であったという現在作家張石山の文章により初めて知ったのであるが、老舎について意外なことと思われるし、また成程と思われるようなことがあった。それをここに紹介しておこう。

それは老舎の死因についてのことである。老舎は六六年八月二十四日北京市内の家を出たきり、帰らぬ人となった。北京西部の太平湖で水死していたのである。自殺か他殺か？文化大革命が発動されたのが六月であるから紅衛兵運動が燃え上がる中として最中のこと、一般には他殺説が有力であったが、それを追求する余裕など官庁にもなかったのは当然であり、全く気の毒な事件であった。

作家老舎といえば、清朝満州旗人の家系、生粋の北京っ子であるが、民国になってからは生活苦を体験した教員であった。彼の小説は古い北京人の生息を生き生きと画かれており、今日では戦前の北京語彙を研究する好個

材料にもなっている。勿論彼の言葉は生粋の北京語であり、請われてロンドン大学で中国語を教えていたころ吹き込んだ音盤が今も残っている。彼はその頃から小説に志を立て、古い北京の人々の生活をテーマとして多くの作品を発表した。殊に人力車夫の生涯を扱った「駱駝祥子」などは、その売れ行きがアメリカでの翻訳本の方が先行するほどであったといわれている。また長編の「四世同堂」も日中戦争下の中国家庭の混乱・苦難の中を守り通す家族愛を画きつづけた。戦後は米國務省の文化交換計画により渡米したが、四九年末帰国し北京で文芸活



動をつづける。「龍鬚溝」や「茶館」を創作して、北京市政府から「人民芸術家」の称号を授与されたほどである。しかも全国文学芸術界連合会主席に任じたこともあった。その老舎が今尚原因不明の水死体となっていたとは、暗い想像を禁じ得ないのであるが、それを説く鍵として次のようなことばがある。

毛沢東が最も感服していたのは康熙皇帝であった。康熙帝は何カ国かの文字が読めるし、その地理や歴史にも精通していた。しかも執政期間が最も長く、実に得難い一代の明君である、と見ていたのである。そこでもの構想を老舎に伝えて、彼に対して康熙帝に関する脚本を書かせてみようとしたのである。老舎は答えた。「あなたのご好意はよく分かりました。しかし私は宮殿に上ったことがありません。大臣たちがどのように皇帝に対してお仕えたのか知る由もありません。生活上の体験をせずして私はなにも書けないのであります」

これは雑誌『人物』九九年第七期の作者宋維生、題名『冰清玉潔 仇儷情（節操潔白、夫婦ノ情）』に掲載されたもの^①だそうである。

今になってこの言葉を案ずれば、老舎の芸術に対する態度から見て、意を決していたことが頷けるのである。

注

- ① 一九六六年四月二十九日から三週間、日中文化交流協会（理事長中島健蔵）の世話で、中国科学院語言研究所の招待を受け、学術交流の訪中団「日本中国語研究者教育者代表団」の一員として訪中。北京、西安、蘇州、上海、杭州、広州の言語研修所、大学を訪問し研究テーマの紹介、成果の発表及び教育上の体験心得等を通じて交歓した。各大学では壁新聞が一面に貼られていたし、北京大学では王力教授らとの懇談の際、若い研究者の教授に対する暴言とも思われる発言に、奮ならぬ事態を感じ取り一同緊張したものだ。それから十数年後に先生ご夫婦を大阪に迎え、関係者同士で会食を共にした。その時の方が話題になると、先生は「あの時のこと、学生だのに勉強もせず、あれが……」と一笑に付されたのだった。
- ② 文革は事実上毛沢東が当時解放軍を握っていた林彪と手を結び六六年五月七日に始動しているが、一般に知られているのは同六月一日毛沢東が北京大学に起こった造反派の壁新聞を大いに支持し学生運動を鼓舞した時が文革の開始。終結は毛沢東が七六年九月九日死亡した後、中央が同一〇月六日に四人組を逮捕した時。
- ③ 『隨筆』二〇〇〇年第四期、張石山「未来世紀考古学索引」を参考にした。

④ 当初は解放軍内で毛沢東の軍事思想を学習するために編まれたが、林彪はこれを全国的政治闘争の書とする目的で大々的に増補出版、文革十年間に五十数億冊に達したという。

⑤ 国共内戦時期、南京国民政府軍と江西省瑞金の「中華ソビエト共和国」共産軍との熾烈な戦闘の結果、三四年一〇月共産軍十万人が瑞金を放棄し、国府軍の包囲追撃をかわして北上大移動を敢行した。困難な十一省二万五千華里（一万数千キロ）を踏破して一年後に陝西省保安に新しい根拠地をつくり上げた。

⑥ 陝西省北部、中国革命の聖地と称せられる。长征後、中共中央の所地となり三六年西安事件、三七年以後の抗日戦争、さらに解放戦争を指導してきた処であり、文革時期には紅衛兵の「聖地詣で」が盛んに行われた。今は歴史文化都市として見学者が絶えないという。

⑦ (一九〇六—一九七〇) 毛沢東の「文芸講話」を実践した「農民作家」として賞賛され、一時は「人民文学」の先達であった。しかし文革が始まると、山西出身の作家たちが形成していた文学グループは一斉に攻撃を受け、長老であった趙は拷問にあつて死亡したという。

⑧ (一九〇九—一九六九・一〇・一一) 歴史学者、北

京副市長。六五年「海瑞罷官」の戯曲を発表したが、「四人組」の一人姚文元からこれは解任した彭德懐の復讐を図る内容で、毛沢東批判であると攻撃した。後にこれを学術論争にする動きも起こったが結局毛沢東側が勝ち本人は迫害された。七九年一月名誉回復。

⑨ (二八九八—一九七四) 解放軍元帥、軍長老の一人で建国後は朝鮮戦争の際、人民志願軍総司令として活躍、帰国後は國務院副総理兼国防部長等を歴任した。五八年からの大躍進政策が行き詰まった時、五九年「廬山会議」で、修正派と継続派とに分かれて激しい論争となり、結果は毛沢東、林彪派が勝ち、正面から大躍進を批判した彭德懐や総参謀長の黄克誠派は解任され、文革開始後は度々の迫害に遇い七四年病死。七八年に名誉を回復された。

⑩ 老舎の死因に関するこの重要な発言の出処は本文通りであるが、それを引用したのは『随筆』二〇〇〇年第一期、丁帆「従姚雪垠の受寵到老舎の『写不了』談開去（姚雪垠の寵愛欲から老舎の『書けませぬ』までを明け透けに話そう）」である。姚雪垠は小説「李自成」第一巻を出版した時、毛沢東に献本して認められ、文革中の出版事情のむづかしい時期であったが、毛沢東のお声掛かりで

紅衛兵の災いを免がれ、小説も二巻、三巻…と巻数を重ねた御用作家であった。これに対し老舎は自己に忠実、文学芸術に対しても真摯誠実であったが故に自らの命を断つことになつたのではないか。そうとしか考えられないのである。しかもこの話は最初に掲載した『人物』の標題の如く身内から出たものであるだけに信憑性が強い。

(しばた　みのる・元文学部教員)

連載

おいてけぼり

— 宮本輝試論 X —

芝田啓治

十四、「おいてけぼり」 — やはり、愛 —

(3) 有島武郎の場合

有島武郎は、一八七八年（明治十一年）父武、母幸の長男として東京で生まれた。武は、薩摩藩士の出で大蔵省関税局小書記官を務めていたが、武郎四歳の時横浜税関長となり、一家は横浜に転居している。当時の横浜は垢抜けた瀟洒な洋館が建ち並び、外国の人々の往来も頻繁で異国情緒を漂わせており、武郎も妹と共にアメリカ人の宣教師の家庭に通って英語を学んでいた。そのような雰囲気の中で、武郎は少年時代を送っている。更には

九歳で学習院予備科第三級に編入学し、皇太子（大正天皇）の学友にも選ばれているのである。正しく、上流社会の子息として恵まれた生活を送っていたが、その彼にとって唯一の弱点は病弱であったことであろう。そのために彼の両親が選んだ進路は彼の健康も気遣い、東京ではなく、また官僚の道でもなく、札幌の地であった。当時、札幌農学校には教授を務め、農学校の舎監をも兼務していた新渡戸稲造がおり、父武と母幸の媒酌を務めたのが新渡戸の養父であるという因縁もあり、武郎を預けたのである。

武郎が自らの信仰という意味でキリスト教に出会った



のも札幌であり、新渡戸稲造と妻メリーの影響大と言えよう。当時、稲造が繰り返し若い学生たちに熱く語ったのは「キリストの一生は短かった。その愛は簡単で、その価値は実行にある」と。又、札幌農学校と言えば、二期生で稲造の同窓には内村鑑三がおり、クラーク博士の教えが浸透していたのであった。

新しい街である札幌は自由な雰囲気の流れ、武郎はすぐさま虜になった。親元から遠く離れ、前途有望な若人と共に学問・思想・信仰・友情・愛を語り合い、そして学んだ。いずれも新たな体験で彼を満足させるに十分

であったが、しかし、そのような新天地での生活にも陥穽はあった。武郎は倒錯した愛にのめり込み、そして、悩むのである。初めてこの非日常的な体験は、自らの生命を絶つことよってでしか解決できないと考え、級友の森本厚吉と定山溪に行くが、思い止まったのである。死を選び、それを実行できない自分。「愛は簡単で、その価値は実行にある」という師の教えが、彼の全身に覆い被さったのであるまいか。決して簡単ではなかったのである。複雑に絡み合い、容易に解きほぐせない苛立ちと無力さとを嫌というほど思い知らされたのであった。

そのような武郎の心を支えたのがキリスト教であり、稲造や鑑三らが創設した札幌独立教会に入会したのである。しかし、その信仰もアベルのそれではなく、地上の放浪者としてのカインのそれであった。正しく彼こそが「カインの末裔」なのであり、その自覚は当初からあったのではないだろうが。彼の信仰は常に満たされず、不安の中で自らを苛むものであり、罪に心を惑わせるものであった。

晴れやかな、そして、爽やかな若者の日常性に戻ろうとするのであったが、努力を積み重ねても「愛の異邦人」としての過去が頭を持ち上げるのである。初めに掛け損ねたボタンは、いつまでも彼の心を苛み続けるので

あつた。

札幌農学校卒業後、悪夢を追い払うべく志願兵として入隊したり、渡米して学問を重ねたりと新しい経験を積み、社会主義者や無政府主義者、更にはフェミニストにも出会うが、彼の心を救うものではなかった。

一九〇八年（明治四十一年）彼にとつて、大きな転機が訪れた。それは、就職・結婚という日常生活の上で欠かせない要因が整つたのである。

武郎は、東北帝国大学農科大学（札幌農学校が昇格し改称）即ち母校の教授として迎えられ、三人の子供を持つ家庭人として漸く日常生活を送るのであつた。しかし幸福を掴みかけると又もや不幸が彼を待ち構えているのである。

「五人の親子はどんどん押寄せて来る寒さの前に、小さく固まって身を守ろうとする雑草の株のように、互いに寄り添つて暖みを分かち合おうとしていたのだ。然し北国の寒さは私たち五人の暖みでは間に合わない程寒かつた」

（有島武郎「小さき者へ」）
妻安子は結核に侵され、結婚生活七年で、男児三名と三十八歳になる武郎を残して死去した。

「然しながらお前達をどんなに深く愛したものがこの世にいるか、或いはいたかという事実は、永久にお前た



ちに必要なものだと思ふのだ」

（同）
大学を去り、妻を亡くした武郎の日常性は大きく軌道を異にする。

「お前達の母上の死によつて、私は生きて行くべき大道にさまよい出た」

（同）
妻の死は、武郎にとつても大きな打撃となつた。妻に先立たれた心境としては、江藤淳が「妻と私」の中で次のように述べている。

「生と死の時間のほうは、こうして家内の傍にいる限りは果たして流れているのかどうかよくわからない。それはあるいは、なみなみと灌えられて停滞しているのかもしれない」

「死の時間だからこそ、それは甘美で、日常性と実務

『書評』編集 STAFF募集!!



の実空間があればほど遠く感じられるのではないだろうか」

「そうしているあいだにも、私の身体の中では、刻一刻と死の時間が育ちつつある。あの堪えがたい疲労が私を内側から崩壊させようとしている」

江藤は、不治の病に侵された妻を温かく見守り、妻の死と直面して熾烈に闘い、そして疲れ、自殺したのである。

有島武郎の苦悩は、妻の死と言う日常生活に於ける不幸により再び蘇り、創作活動に専念する事によって、残された七年の人生を生きようとするのである。そのなか

で、キリスト教及び聖書は常に武郎の心の中にあり、気掛かりであったに相違ない。

「神を知ったと思っていた私は、神を知ったと思っていたことを知った。私の動乱はそこから芽生え始めた」又、「或る女」の主人公葉子は「本当は神様を信ずるより……憎む方が似合っているんです」と言っている。

「自分は神さへ、おびえてゐました。神の愛は信ぜられず、神の罰だけを信じてゐるのでした。信仰。それは、ただ神の咎を受けるために、うなだれて審判の台に向ふ事のやうな気がしてゐるのでした」

(太宰治「人間失格」)

『書評』は私たちによる文化形成のための印刷メディアです。あなたも『書評』を創ってみませんか。

「雑誌」に興味のある方、思想・文化活動をやってみたい方は、『書評』編集をはじめ、講演会や映画上映のSTAFFになってみましょう。

私たちは、いつでもあなたをお待ちしています。

★連絡先 〒561-0842 吹田市千里山東3-10-1

関西大学生生活協同組合組織委員会内(本部棟3階)

『書評』編集委員会

☎(0)6-6368-17530(直通)

☎(0)6-6368-11121(内線743355)

e-mail: kucopori@sun-net.or.jp

と同質のものではないだろうか。

しかし、どこまでいっても武郎の信仰は、アベルではなく、カインのそれであった。

愛に關しても、キリストの教える愛を受け入れたい、頼ろう、救われたいと考えるのだが、彼のかつての歩みが頭を擡げ、正反対の場所に自らを据えるのである。

有島武郎は、聖書に挑み、逆さに読むのである。そして、自らの愛に対する考えを「惜みなく愛は奪う」の中でまとめるのであった。

「ポーロはその書翰の中に愛は『惜みなく与え』云々といった。それは愛の外面的表現を遺憾なくいい現した言葉だ。愛するものとは与えるが故に富み、愛を受けるものは受けるが故に富む」

しかし、武郎はこの言葉を信じる事が出来ず、反論する。

「愛が与えることによって二倍するという現象は、愛するものと愛せられたるものとの間に愛が相互的に成り立った場合に限るのだ」

「高尚といえは言う程それがうそに見える。非常に巧みな、そして狡猾な仮面の下に隠れた功利主義としか思われぬ」

「愛は自己への獲得である。愛は惜みなく奪うものだ。」



愛せられるものは奪われているが、不思議なことには何物も奪われてはいない。然し愛するものは必ず奪っている」

「見よ、愛がいかにか奪うかを。愛は個性の飽満と自由とを成就することにのみ全力を尽くしているのだ。愛は嘗て義務を知らない。犠牲を知らない。奪われるものが奪われることをゆるしつつあろうともあるまいとも、それらに煩わされることなく愛は奪う。若し愛が相互的に働く場合には、私たちは争って互いに奪い合う。決して与え合うのではない」

「若し私が愛するものを凡て奪い取り、愛せられるものが私を凡て奪い取るに至れば、その時に二人は一人だ。そこにはもう奪うべき何物もなく、奪わるべき何者もな

い。

だからその場合彼が死ぬことは私が死ぬことだ。殉死とか情死とかはかくの如くして極めて自然であり得ることだ」と結論付けているのである。

一九二〇年（大正九年）に書かれたこの文は、彼の信仰や人生、そして創作活動や愛に対する今までの考えをまとめあげたものと言うことができよう。先ず自らに対して純粋に生きるという表現が愛であり、その延長上に自己の個性の成長が見られ、完成が生まれると考えるのであった。そして、更に外界を愛で同化することによってのみ、自己の成長や完成が果たされ完結すると考え、こうして愛は自他の区別なく、一元的、全体的なものとなるのである。彼の言う「本能的な生活」はこうして生まれ、自らも最上と位置づけた此の行き方を全うし、実行するのであった。

非日常性に於ける愛は、日常性のそれとは自ずと性質を異にする。如何なる努力をも受け付けず、まやかさもきかず、ひたすらその道を歩み続けられ、互いに奪い合つて二人が一つになるより術がないのではないだろうか。大怪我を覚悟で途中下車するか、そしてその時の傷を隠し持って悶々と生きていくか。それとも、有島武郎のように有夫の女性と心中するより道がないのである。

有島はかつて禁断の実を食べ、その罪悪感に悩まされたが、茨の道である自らの愛を純粋に貫き通すことにより、その人生を生きかつそれに対する問い掛けを続けることが彼の創作に繋がって行くのであり、正に自らの愛に生命を懸けたのであった。「惜みなく愛は奪う」と判つていても、そして行き着く先に死が待ち構えていようとも、信ずるこの道を歩むのであった。

（しばた けいじ・経済学部卒業生）

編集後記

書評一一七号をお届けします。

今号の書評では、「学生短評」を特集として取り上げています。「ジェンダー」「フォトジャーナリズム」「環境問題」など、取り上げているジャンルは多岐に渡っており、普段本を読まないという人にも手を付けて頂き易いのではないかと思います。

古来より、本は「最良の友である」と言われてきました。実際、本には「いつでも好きな時に読め、どこへでも持っていける」という事の他にも、多くの長所があります。近年、本を読まない若者が増えていると言われていますが、人に話せないような個人的な悩みを本が助けてくれる事もあり、こうした本の役割は、今尚その重要性を失っていません。

難しいものや自分の興味の無いようなジャンルの本については、やはり読むのを躊躇してしまうと思いますが、この書評を「挑戦するきっかけ」とされてみては如何でしょうか。普段本を読まない人は勿論、普段本を読んでいるという人も是非とも新しいジャンルに挑戦してみてください。かくいう私も現在、友人から勧められた新しいジャンルに挑戦中です。

(中川 由香里)



※梁先生、山村先生の御都合により、「在日韓国・朝鮮人の教育問題ノート」、「〈研究余滴〉フランス詩の歴史」は休載とさせていただきます。御了承下さい。

111号



〈特集〉 読書案内

- 「インターネット法律問題Q&A集—「サイバースペース法」入門」 山下幸夫 著
- 人権問題をめぐる本の紹介

〈連載〉

芝田 稔/山村嘉己
芝田啓治/梁 永厚

114号



〈特集〉 読書案内

高森八四郎/木岡伸夫
森岡 孝二/柴 健次
舟場 拓司/黒葛裕之
山本 秀樹

〈連載〉

芝田 稔/山村嘉己
芝田啓治/梁 永厚

112号



〈特集〉 読書案内

- 現代版「読書のすすめ」
- 「『世界』主要論文選 1946-1995戦後50年の現実と日本の選択」
- 時代を読む
- 『大学改革を探る—大学改革に関する全国調査の結果から』

〈連載〉

芝田 稔/山村嘉己
芝田啓治

115号



〈特集〉 読書案内

上井久義/田中欣和
植村邦彦/若森章孝

〈連載〉

芝田 稔/山村嘉己
芝田啓治/玄 善允

113号



〈特集〉

短評…おすすめの本6冊

- よくわかるダイオキシン汚染
- いじめ 教室の病
- ドイツを変えた 10人の環境バイオニア

●文学入門

●生きるための学校

●母は枯葉剤を浴びた

〈連載〉

芝田 稔/山村嘉己
芝田啓治

116号



〈特集〉 読書案内

小野紀明/高橋隆博
橋本恭之/松本祥尚
神谷国弘/山本秀樹
岡田朋之/塩村 尊

〈講演録〉

原子力政策の現在
鎌田 慧

〈連載〉

芝田 稔/山村嘉己
芝田啓治/玄 善允

第117号
書評

季刊 『書評』 2000年 11月 通巻117号

編集・発行 関西大学生協同組合・組織委員会内『書評』編集委員会
連絡先 吹田市千里山東3-10-1 ☎06-6368-7530 or 6368-1121 (内線74355)
頒 価 250円 e-mail:kucopore@sun-inet.or.jp